

佐賀市 1 歴史探訪

さが じょうしゃち もん つづきやぐら 佐賀城鯨の門及び続櫓

【城内二丁目】
(重要文化財 昭和32年6月18日指定)

佐賀城は藩政期に2回の大火に見舞われました。1回目は享保11(1726)年で、天守閣、本丸、二の丸などを焼失。火災後、二の丸のみを再建、藩政の中心としました。2回目の火災は、天保6(1835)年で、二の丸が全焼しました。時の藩主、鍋島直正は本丸再建を表明し、それまで二の丸や城内に分散されていた行政機能をこの本丸に取り込みました。

佐賀城鯨の門は、この本丸再建の時、本丸出入りの門として天保9(1838)年に完成したものです。建物は二重二階の櫓門に一重二階の続櫓が門の北西部石垣に続いています。屋根は本瓦葺、入母屋造りで、棟の両端に青銅製の鯨が置かれています。この櫓門は幕末期の優れた建物で、佐賀藩36万石の石高にふさわしい格式を有しているものといえます。

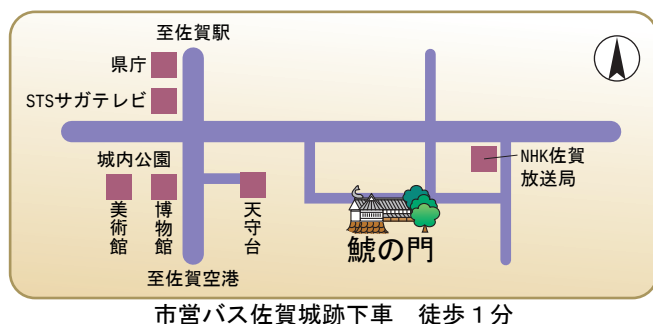


▲重さ約200kgの鯨



▲鯨の門及び続櫓

一口メモ 佐賀城本丸跡の地下には、天保期に再建された本丸建物の礎石群が残っていました。県立佐賀城本丸歴史館は、それらの礎石を破壊ないように建設されています。



佐賀市 2 歴史探訪

さが じょうほん まる やぐらだい しゅうちく き ろく き せき 佐賀城本丸櫓台修築記録の「記石」

佐賀城本丸の範囲は、ほぼ旧赤松小学校敷地(現在の佐賀城本丸歴史館)にあたります。この本丸には南西の隅に「櫓台」がありました。本丸に櫓を建てよう計画されたようですが、どのような櫓が建っていたのかははっきりしません。もしかしたら、櫓台を整備しただけで櫓は建てられなかったのかもしれません。

この「櫓台」が、元文3(1738)年に壊れました。この櫓台を修築した時、その記録が石に刻まれ、櫓台の石垣に組み込まれました。そこに刻まれた記録によると、石材は現在の大和町梅野や小城町西郷から集め、基礎には松材を用いたことや作業員の延べ人数などがよく分かります。

この「記石」は、旧佐賀師範学校建設工事の際に発見され、同地が旧赤松小学校になった後にはその庭園内に保存されました。平成5年の赤松小学校の移転に伴ってこの記石も移され、現在は佐賀城鯨の門を模した赤松小学校校門の東側に保管されています。



▲鯨の門を模した赤松小学校の校門と記石

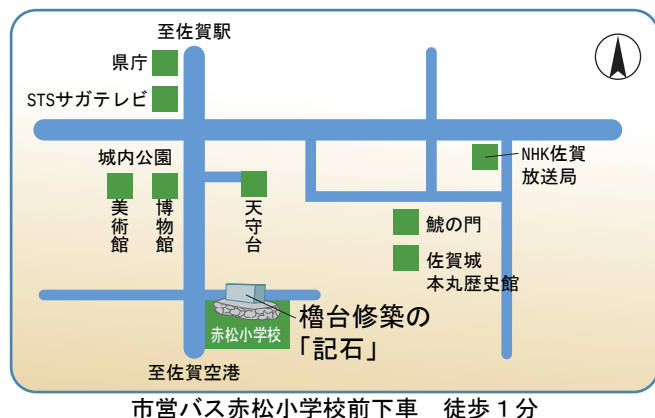


▲記石の表面
「元文三年五月崩損(損)」とあり、元文三(1738)年5月に櫓台が壊れたことが分かる。

一口メモ

同じような「記石」は佐賀城南堀護岸からも発見されており、現在、佐賀県立博物館の東側庭園に保管されています。この「記石」には、佐賀城のお堀の護岸を石垣で構築したことが書かれています。佐賀城のお堀護岸の土留めは、佐賀城ができた時には板を使っていました。

現在、私たちが見ることのできる「赤石の石垣護岸」は最も古いもので、寛政年間(1789～1800年)頃に造られたものです。



市営バス赤松小学校前下車 徒歩1分



県立博物館にある記石

佐賀市 3 歴史探訪

さが じょう ほり いし がき ご がん こう ぞう 佐賀城お堀の石垣護岸の構造

佐賀城のお堀の石垣は寛政年間(1789～1800年)頃に構築されました。県立美術館の対岸、南堀端の散策ルート内にこの石垣の構造を紹介した場所があります。

そこには幅約2.5メートル、高さ約1.3メートルの「赤石の石垣護岸」が建っています。この石垣は現在地から19メートル西に埋まっていたものですが、排水溝敷設の際、解体し、現在地に移設復元しました。

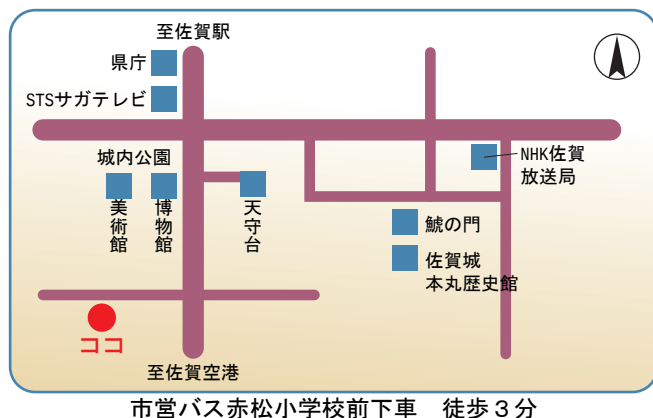
石垣は、加工した赤石を5段積みになっています。この石垣の下部には、石の重みで石垣自体が沈下しないように「梯子状^{はしごじょう} 胴木^{どうぎ}」と呼ばれる丸太をはしごのようにつなぎ合わせたものが置かれています。また、堀内に石垣がせり出すのを防ぐため、胴木の前面には約1メートル間隔で杭が打たれていました。軟弱な地盤を克服するために考えられた先人の偉大な知恵といえるでしょう。



▲赤石の石垣護岸



▲石垣の説明書き



一口メモ

佐賀城堀の石垣護岸に使用されている赤い石材は、一般に「赤石」と呼ばれています。鉱物学的には「安山岩系凝灰角礫岩」といわれる火成岩で、小城、多久に産出する加工しやすい石材です。この「赤石」は佐賀城堀の護岸だけではなく、佐賀城下の水路護岸や建物の礎石としても用いられています。

佐賀市 4 歴史探訪

りゅう たい じ けん ちく ぶ ざい 龍泰寺の建築部材

龍泰寺は永禄年中(16世紀中頃)に龍造寺隆信が、一族の菩提寺として建立したもので、寺名には「龍造寺安泰」の意味が込められています。

本堂と位牌所、庫裏は大正から昭和初期にかけて建築されました。これらの建物は、佐賀城本丸の玄関・式台を解体移築して、その部材が用いられているものといわれていました。しかし、昨年行われた調査によると、部材には転用材が使用されているのは確認できるが、棟札などの直接資料が発見できなかったため、佐賀城本丸建物の部材を転用したのかどうか判定はできないとのことでした。今後、龍泰寺に関わる文献資料の発見や本丸建物の部材を使ったとの証言が得られれば確定できるとのことです。

現在の龍泰寺の写真と佐賀城本丸の玄関・式台の写真を見比べてください。皆さんはどう思われますか。

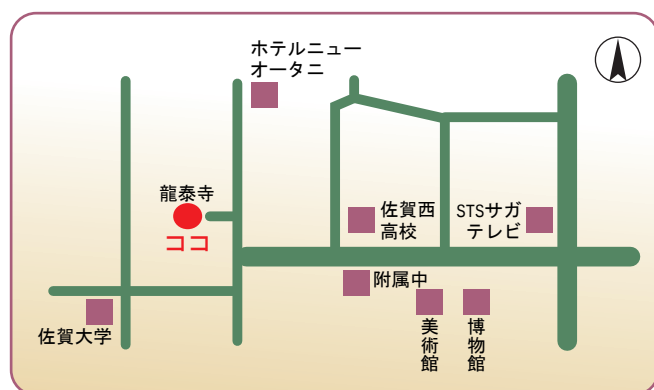


▲龍泰寺の庫裏



▲佐賀城本丸の玄関・式台(大正年間に解体された)

- ※1 庫裏…寺の台所、住職や家族の居間。
- ※2 式台…表座敷と玄関などとの間に設け、客に対して送迎のあいさつをする部屋。
- ※3 棟札…棟上げの時、工事の由緒、建築の年月、建築者などを記し、棟木に打ちつける札。



市営バス佐大前下車 徒歩3分

一口メモ

龍泰寺の敷地は、もともと中世の豪族、少貳氏の居城である「与賀城」があったところといわれています。城の正確な範囲は分かっていませんが、龍泰寺を中心とした広がり、北側にある与賀神社は、与賀城の鬼門の鎮守とされていました。

また、龍泰寺山門の東側には大隈重信の墓があります。

佐賀市 5 歴史探訪

さがじょう たふせがわ 佐賀城と多布施川

佐賀城内の多布施川の流れをたどってみませんか。
多布施川がお堀と初めて交差するのは、県議会議事堂の北西側で、「北の御門」があった付近です。ここから県議会議事堂の西側を通り、佐賀西高等学校の東側を経て、サガテレビの南側に至ります。ここで多布施川は北に向かって流れます。何回か折れ曲がりながら市村記念体育館の南側を通り、^{まんぶじま}万部島を経て県立病院の北側を通って「城外」に出ます。

このルートで散策すると、次のことに気付きます。

ひとつは、多布施川の水がお堀に直接流れ込んでいないことです。それは多布施川が飲料水として城内に引かれたものだからです。北の御門跡付近に立ち、多布施川とお堀の水面の高さを比べてみてください。多布施川が高く、お堀が低くなっていて、この部分には立体交差の工夫がなされています。

もうひとつは、低い南から高い北に向かって流れる部分があることです。佐賀市街を流れる川の中でも、このような流路をもっているのは多布施川だけです。これは、流域の利用度を高める目的で何回も屈曲させ、その結果北流する部分ができただけで、佐賀藩政期の高度な土木技術がうかがえます。

一口メモ

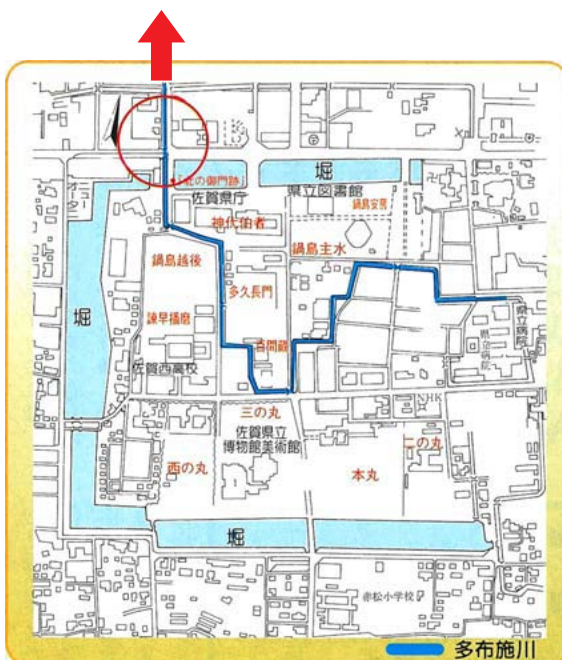
飲料水確保のため、多布施川は佐賀城の生命線といえるものですが、この流れは本丸や二の丸(附属小学校、NHK付近)には直接及んでいません。むしろ、旧龍造寺系の諫早屋敷、鍋島越後屋敷、多久屋敷などがこの川の直接的な恩恵を受けています。これは、龍造寺隆信没後、その家臣団は鍋島政権下に組み入れられていきますが、その家臣団を統制していくための配慮と考えられています。



▲手前: 多布施川、奥: 佐賀城の北堀



▲県庁から見た佐賀城北堀と多布施川の交差



市営バス県庁前下車 徒歩3分

佐賀市 6 歴史探訪

こう どう かん あと 弘道館跡

弘道館は、天明元(1781)年、佐賀8代藩主鍋島治茂^{はるしげ}の時、藩校として佐賀城下松原小路に建てられたものです。

教授には、「寛政の三博士^{かんせいさんはかせ}」として知られる古賀精里^{せいいり}が任じられ、藩士子弟の教育に努めました。

10代藩主鍋島直正の時には、北堀端に移して整備拡張されました。ここでは、学習が強化され、朝6時から8時までと9時から12時まで、午後は1時から5時まで、夜は、6時から10時まで授業があったそうです。授業の内容は中国の学問である儒学^{じゅがく}や佐賀藩の歴史、武道などがありました。いわゆる「葉隠」が授業で用いられたことはなかったようです。

弘道館の食事は、非常に質素だったようで、寮生活を体験したことのある歴史学者の久米邦武によると「朝はたくあんか菜漬^{なづけ}、昼はちょっとご馳走^{ちそう}で夜は2杯の量^{はか}り飯に塩だけであった。」と思い出を語っています。

幕末から明治にかけて活躍した副島種臣^{たかとう}、大隈重信、江藤新平、大木喬任、佐野常民らも弘道館出身者です。開校以来明治5年に廃止されるまで約90年間、佐賀藩の人材育成がなされました。今、弘道館の建物は残っていませんが、その跡地には往時をしのぶ「弘道館跡」の碑が建っています。



▲鍋島家資料を展示している徴古館



▲弘道館跡の碑

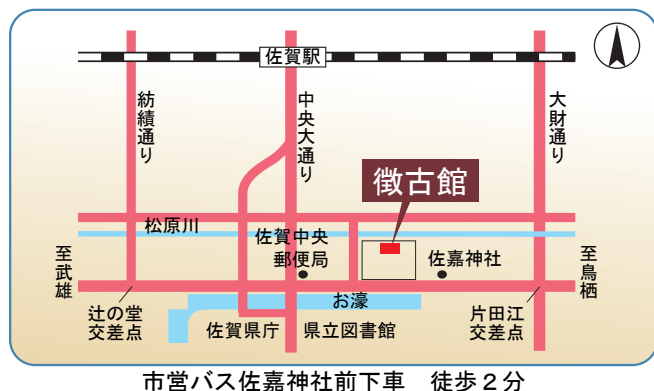
一口メモ

○弘道館跡には鍋島家資料を展示公開している「徴古館」があります。江戸時代の御道具類や古文書など、明治、大正、昭和に至る鍋島家に関する資料あるいは郷土関係の書画類などの資料が保管されており、順次公開されています。建物は平成9年に国の登録有形文化財に指定されました。

○徴古館入口の植え込みに「石敢當^{いしがんとう}」と刻まれている石碑があります。起源は中国に求められ、辻々の道ばたには「魔よけ」として建てられているものです。わが国では、沖縄や鹿児島には多く分布していますが、北部九州ではあまり見られません。



▲徴古館入口の石碑



佐賀市 7 歴史探訪

まんぶじま 万部島

佐賀城の絵図を見ると、東堀に半島状に突き出ているところがあります。ここを万部島といいます。ここは、領国の安泰や領民の無事、五穀豊穡を願って、歴代佐賀藩主主催による法華経一万部の読経が行われた所で、それを記念する石塔群が建てられています。

万部島の由来は、永正2(1505)年、龍造寺家兼主催による法華経一万部の読経がなされ、ついで天文14(1545)年にも2回目の法華経読経がなされました。これ以来「万部島」と呼ばれたそうです。

龍造寺氏の村中城(現在の佐賀西高等学校付近)や水ヶ江城(現在の赤松小学校付近)があった頃のことですが、本来の万部島は、その両城の間の堀や川に浮かぶ島であったのかもしれませんが。それが、鍋島直茂・勝茂父子による佐賀城造営によって、絵図にあるような形に整備されたものと考えられます。「牛島」「愛敬島」という地名に見るように、そのころの中心部は堀や湿地に囲まれた「島」が点在していたのではないのでしょうか。

現在、万部島周辺は埋め立てられていて、当時の景観は残っていませんが、建ち並ぶ「万部塔」を見て、佐賀藩の宗教行事や、広大な堀を思い浮かべてみませんか。



▲万部島



さがじょうぶんけんおんえず
▲佐賀城分間御絵図(鍋島報效会蔵)



▲万部塔



▲佐賀の役記念碑



市営バス佐嘉神社前下車 徒歩5分

一口メモ

万部塔が建ち並ぶエリアの南に佐賀の役記念碑があります。この碑には佐賀の役犠牲となった江藤新平、島義勇をはじめ二百余名の戦没者名が刻まれています。この碑は、もとは西の御門付近にありましたが、大正9年に、この地に移設されました。

佐賀市 8 歴史探訪

さがはんしゅ ござのま おいのま 佐賀藩主の御座間(御居間)

てんぽう
天保年間に再建された佐賀城本丸の建物群は、明治7(1874)年の佐賀の役でそのほとんどを焼失してしまっただけにいわれることがありますが、そうではなかったようです。

戦災を免れた本丸の建物群は、明治7年以降も役所や学校に使われ、それが老朽化すると新しい建物を建てるために、だんだんと解体されていったというのが実際のようなのです。

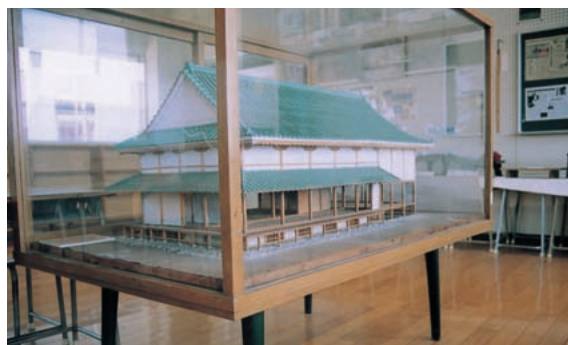
この本丸建物群の中で一番長く現地に残っていたものが、藩主の居間である「御座間」でした。この建物は昭和32(1957)年まで、赤松小学校で利用されていましたが、新校舎建築により、南水ヶ江の大木公園に移転され、南水会館として活用されることになりました。

先頃、この南水会館の調査が建築の専門家によって実施されました。それによると、大規模な改変がなされているが基本的な木組みはそのままであり、佐賀城本丸御殿の「御座間」に復元が可能という調査結果が得られました。また、天井裏の材木に「御座間」という墨書きの文字も発見されました。

現在、佐賀城本丸跡に移築復元され、県立佐賀城本丸歴史館の一部として、来館者に公開活用されています。



▲旧赤松小学校にあったころの御座間



▲御座間の模型(赤松小学校保管)



▲移築復元前の南水会館(旧赤松小学校から移築された御座間)

一口メモ

- 赤松小学校にあった御座間が南水ヶ江に移転されることになったとき、同校の先生方によって20分の1の縮尺模型が制作されました。これは今も赤松小学校に保管されていて、床の間や建具など文献資料だけでは明らかにできない部分を知ることができるものです。
- 南水会館の玄関先右手に「寛保三年癸亥三月良辰御築謹制之」と刻まれた石材があります。本丸の南西隅にあった「櫓台(やぐらだい)」修復の際に刻まれたものと考えられます。



市営バス龍校前下車 徒歩5分

佐賀市 9 歴史探訪

みず が え じょう あと 水ヶ江城跡

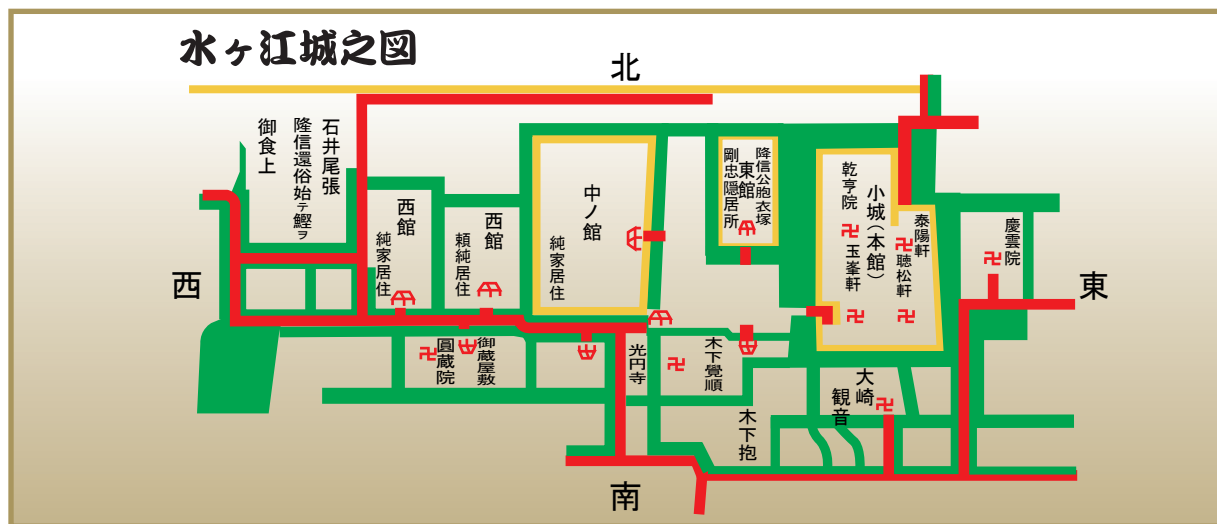
佐賀城ができる前(戦国時代)のことです。その頃佐賀は、戦乱が続き、その中から龍造寺氏が勢力を拡大していきました。龍造寺氏の城は佐賀西高等学校付近を中心とした「村中城」と、赤松小学校周辺の「水ヶ江城」がありました。龍造寺隆信はこの二城を拠点として「五州二島の大守」と呼ばれる戦国大名に成長していきました。

村中城は、隆信没後、鍋島直茂・勝茂父子により整備拡張されて佐賀城ができあがるわけですが、水ヶ江城はどのような城だったのでしょうか。隆信の頃の絵図は残っていませんが、江戸時代になってから制作された絵図(下図参考)によると、赤松小学校付近に「西の館」、「中の館」、龍造寺隆信誕生地である中の館児童公園付近に「東館」、その東に「本館」が配置されていて、それぞれの館の周りには堀が巡らされていました。

水ヶ江城の正確な範囲はわかっていませんが、記録によると約30haの広さがあったということです。江戸時代になると水ヶ江城は整理されて、龍造寺氏系統の家臣団の屋敷地となりました。



▲龍造寺隆信誕生地(中の館児童公園)



一口メモ

龍造寺氏の家紋



龍造寺家
(十二日足)

太陽が光を放つ様子をかたどったもので、一般に「十二日足(じゅうにひあし)」といいます。龍造寺氏に縁のある龍泰寺や龍造寺八幡宮など寺院の瓦などに見ることができますので、参詣の際、ちょっと屋根を見上げてみませんか。



▲水ヶ江城があったと思われる周辺

佐賀市 10 歴史探訪

こう でん じ すぎ ど 高伝寺の杉戸

高伝寺は佐賀藩鍋島家の菩提寺です。墓所には鍋島家・龍造寺家の石塔群が林立し、一大景観を形成しています。また、同寺は梅の名所でもあり、境内、墓所を中心に植栽されていて、開花期には紅梅、白梅が咲き乱れ、多数の見学者が訪れています。

このお寺には、大涅槃像、鍋島勝茂の子で若くしてなくなった忠直の坐像、御位牌所などの文化財があることが知られていますが、平成10年、11年に実施された佐賀城本丸御殿復元資料調査において、佐賀城の御殿に関係すると考えられる高伝寺の板戸、衝立も調査がなされました。

衝立は杉戸を再利用したもので、庫裏の玄関に置かれ、杉戸は本堂などで使われています。これらには、鶴や虎、人物が鮮やかな色彩で描かれています。

これらの杉戸は佐賀城御殿で使われていたものとの伝承が以前からありましたが、それが事実なのか確認されていませんでした。

調査では、杉戸の寸法に注目しました。それによると、普通の家屋のものより大型であり、佐賀城本丸御殿のような大規模な建物に使われていた可能性が高いという調査結果が得られました。

この杉戸の優雅さを感じながら、佐賀城本丸御殿に思いをはせて見ませんか。



一口メモ

本堂のご本尊の左側に小さな建築物があります。これは高伝寺釈迦堂といい、その内部には「お釈迦様」と文殊菩薩像、普賢菩薩像が安置されています。

これらは鍋島勝茂が承応2年(1653)に長崎で購入させた赤梅檀(しゃくせんだん=香木的一种)を用いて承応4年に京の仏師、宗仁に制作させたものです。



佐賀市 11 歴史探訪

さがじょうでいりぐち 佐賀城の出入口

佐賀城の門といえば「鯨の門」を思い浮かべますが、現存する鯨の門は本丸の門として天保9（1838）年に建設されたものです。江戸時代、広い城濠に阻まれた佐賀城の出入口は4カ所設置され、それぞれに門がありました。これらの門の古写真や詳細な絵図は残っていませんが、「佐賀城分間御絵図」に簡単に描かれているものからその姿を偲んでみましょう。

「①北御門」^{きたのごもん}佐賀県議会議事堂の北西にあったものです。佐賀城北の御門には「大手門」の呼称はありませんが、メインゲートの性格を有するものといえます。

「②西御門」^{にしのごもん}城内西堀端に所在していました。この門の東側には、鉤型の土塁があり、城内の遠望ができないように工夫されています。

「③東御門」^{ひがしのごもん}市村体育館の東にある土塁が東西道路により分断されているところにありました。

「④裏御門」^{うらごもん}佐賀大学附属小学校の東側に南北に走る道路が東に折れ曲がるところにありました。

これらの門は略図として描かれているので詳しくはわかりませんが「高麗門」という形式の門ではなかったろうかと思われます。

現在、佐賀城内に行く場合、さえぎるものはありませんが、当時は厳しい警備がなされていたようです。



▲佐賀城分間御絵図（ ）内は現在の建物

一口メモ

今回掲載した「佐賀城分間御絵図」は寛政8（1796）年に描かれたものです。絵図をよく見ると、本丸の門（現在の鯨の門があるところ）が小さく、二の丸の門（⑤）が大きく描かれ、その屋根には「鯨」が乗っています。

このわけは、享保11（1726）年の佐賀城大火以後の約110年間は、本丸が再建されず藩政の中心は二の丸となっていたからです。



◀北の御門絵図

①
▼現在の北の御門跡



県議会議事堂付近



◀西の御門絵図

②
▼現在の西の御門跡



西御門付近

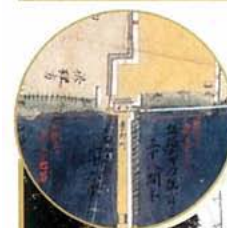


◀東の御門絵図

③
▼現在の東の御門跡



市村体育館南西付近



◀裏御門絵図

④
▼現在の裏御門跡



附属小学校付近

佐賀市 12 歴史探訪

えとうしんぺいしゅうえんち 江藤新平終焉の地は？

江藤新平は江藤助右衛門の長男として佐賀城の北西、八戸村に生まれました。藩校弘道館で優れた成績で修め注目されましたが、家が貧しく苦学しました。

文久2(1862)年、激動期の政治情勢の中で脱藩上京して視野を広げたことで、明治維新期に佐賀藩を代表して重く用いられて活躍し、江戸への遷都を唱えたりしました。

明治になってからは、司法卿として日本の近代的な法律の整備を行い、また、参議として日本の政治運営に直接関わるなど、学識をもとに制度づくりを行ったり、新平の活躍は広く知られているところです。

明治7(1874)年、明治新政府と考え方が衝突し「佐賀の役」の指導的立場に推され政府軍と戦い、敗れました。

江藤新平の業績は、近年、佐賀でも高い評価があり、これを顕彰するために、銅像建設、生家跡の説明などがなされています。市民有志の方々と、佐賀城本丸跡が江藤新平の終焉の地であるとして「ああ無念の木柱」も設置されました。

しかし、佐賀城本丸で新平が処刑されたかどうかは、疑問が残る部分もありましたので、専門家の先生に調査をお願いしたところ、次のような資料があることを教えていただきました。



▲佐賀城跡全景(南から撮影)

鍋島文庫

【内庫所 日記書抜】

明治7年4月13日(新暦)

佐賀暴動罪魁江藤新平・島団右衛門其外拾貳名^{※1}

元二ノ御丸にて斬首 江藤・島には嘉瀬御仕置場にて梟首^{※3}

※1 島団右衛門=島義勇のこと

※2 二ノ御丸=佐賀城二の丸

※3 梟首=さらし首

【(個人)日誌】

旧二月(旧暦)

同廿六夜七ツ頃嶋団右衛門殿江藤新平殿老人充呼出

二ノ御丸之内にて無利に切殺 都合拾貳名



▲佐賀城本丸跡(旧赤松小学校)の南東の隅に立っていた「ああ無念」の木柱

この資料から、終焉の地は本丸ではなく二の丸と判断されます。二の丸のどこであるかについては、今後の研究に期待したいと思います。

佐賀市 13 歴史探訪

さが じょう てん しゅ だい き そ こう ぞう 佐賀城天守台の基礎構造

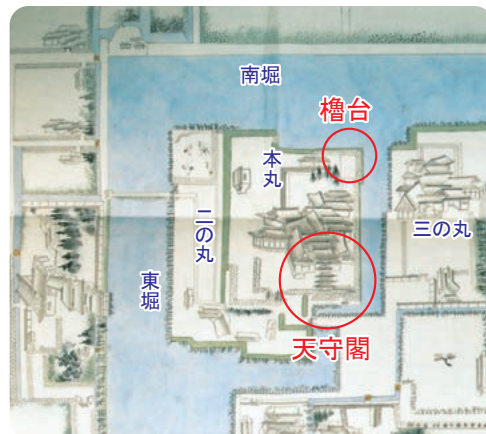
佐賀城は鍋島直茂・勝茂親子により、龍造寺氏の村中城をベースにして拡張・整備されたもので、慶長16年(1611)に完成したものです。天守閣もその時に建築され、5階建てのものでした。天守閣が詳細に描かれている図は残っていませんが、慶長年間後半(1609～1614)に作成された「佐賀小城内絵図」さがしょうじょうないえずには簡略化されたタッチで描かれているものがあります。この天守閣は享保11年(1726)の佐賀城の大火で焼失し、その後天守閣は江戸時代を通じて再建されませんでした。

もともと、天守閣^{やぐら}というのは、櫓(または矢倉)が発展したもので、本来の目的は遠方や周囲を展望するための施設で、武器庫でもありました。それが、城郭の要衝に防備施設として発展し、天守閣となりました。この天守閣の土台である天守台の構造はどのようなものだったのでしょうか。

佐賀城の天守台の地下構造は、発掘調査がなされていませんので、詳細は分かりませんが、佐賀城天守台の南方約100mにあった、櫓台の発掘調査結果が参考になると思います。

佐賀城本丸の櫓台は、約5～6mの高さであったと考えられますが、明治以降に壊され、平坦になっていました。発掘調査では4～5段の石垣が地表下に残存し、その上面で南北幅約13m、東西幅約16mの規模であることが分かりました。石垣の内側には径10～20cmの石を幅約2mの範囲でぎっしり敷き詰めていて、石垣内部を補強する工夫がなされています。この石垣の下はまだ調査を行っていませんが、城堀護岸下部調査や文献から判断すると、地盤沈下を防ぐために石垣の下に多数の松材が敷かれているものと考えられます。おそらく天守台の地下構造も本丸の櫓台の構造に準じているものと考えて良いものと思われます。

地盤が軟弱な佐賀平野で、天守台は完成から約400年たった今でもほぼ当時に近い姿を残しており、先人の土木技術がいかに高度であったかが分かります。



▲佐賀小城内絵図(部分)



▲佐賀城天守台(平成13年頃の様子)
(頂部の建物は明治建築の協和館 北東部から撮影)



▲本丸南西隅にあった櫓台の調査状況

一口メモ

本丸南西隅にあった「櫓台」は藩政期の各種絵図にはっきり描かれています。しかし、櫓が描かれている絵図はありません。発掘調査により櫓台の石組みが発見されたので、「櫓台」の存在自体は史実であることが分かりましたが、現段階では櫓の存在は証明できない状態です。櫓が描かれた絵図が発見されればいいですね。

佐賀市 14 歴史探訪

じょうない たふせ がわ いし がき 城内の多布施川石垣

現在、佐賀城の石垣は、天守台、鯨の門周辺や城堀護岸、多布施川護岸に見ることができます。慶長年間に佐賀城ができたころには、天守台、鯨の門周辺や北の御門付近の多布施川にしか石垣は造られていませんでした。城堀の石垣護岸が最初に築かれたのは、記録によると寛政年間で、城堀全域の石垣護岸が完成するには、だいぶ時間を要したようです。

多布施川の護岸も城堀と同じようにしてだんだんと整備されていったものと考えられます。城内の多布施川流域を散策すると、色々な石垣護岸があることに気づきます。赤い石で積み上げているところや、黒っぽい石、コンクリート製のもの、新素材を用いているものなど多種多様あります。

これらの中では、赤石護岸が最も古いものと考えられますが、赤石が加工しやすい反面、耐久性に問題があることから、積み替えが必要になると別の石材で再構築されてしまっているようです。耐久性に問題があるとはいえ、赤石護岸が残っている箇所は風格や歴史の重みさえも感じられます。

近年、公共事業として実施される石垣護岸の積み替えが行われる場合、この歴史的景観に配慮し、再利用できる赤石は、荷重がかからない部分に利用するようになってきました。水路護岸の改良は、今後も歴史的景観を考えながら実施していきたいものですね。

一口メモ

多布施川の清流は、城下町佐賀のライフラインでした。だから、藩の法令にも清流の保全、水路の埋め立て、新設水路の建設などについては強い規制がありました。現在の私たちにも共通する事柄のようですね。



▲布積み技法の石垣[赤石を使用]
(佐賀県職員互助会館東側付近)



▲みだれ積み技法の石垣[赤石を使用](同上)



▲みだれ積み技法の石垣(佐賀西高等学校東側付近)



▲改修された石垣護岸。一部に「赤石」が使われている
(県庁南側)

佐賀市 15 歴史探訪

たくやしきみなみ すい る い こう 多久屋敷南の水路遺構

多久家は龍造寺隆信の弟長信を祖とし、その子安順(やすとし)のときから多久姓を名乗りました。隆信没後の龍造寺一族は、鍋島政権下に組み込まれ、佐賀藩政の一翼を担う重臣家として存続しました。この多久家は、佐賀藩政下では武雄鍋島家、諫早家、須古鍋島家と同列の、「親類同格」家と位置づけられ藩経営のリーダーである「請役家老」を務める家でした。

鍋島佐賀藩体制に組み込まれた龍造寺一族は藩経営でも中核的存在でしたので、その城内屋敷地も広大な土地が与えられています。そこは、佐賀城建設の基礎となった龍造寺氏の居城「村中城」の二の丸に当たり、鍋島家の配慮がうかがわれます。

多久屋敷跡の南北範囲は、県庁南側の道路から県庁南別館駐車場までと推定されますが、今では、その輪郭はほとんどわからなくなっています。この屋敷地の南限が昭和62年の埋蔵文化財の確認調査で明確になりました。調査では、水路護岸基礎が発見されました。佐賀城絵図に当てはめてみると多久屋敷と百間蔵の間にあったものと認定できるものでした。

このとき検出した水路護岸基礎の上には、県公用車車庫が建っていますが、その建設の際には、掘削が石垣護岸基礎を壊さないように配慮されました。

現在、県庁南別館駐車場には、石垣護岸に関する説明板と標柱が建っていますので、城内散策の折にでもご覧ください。また、駐車場でほどには東西南北に楠が数本並んでおり、それが水路の存在をしるばせるものとなっています。



▲調査箇所にたつ説明板、標柱



▲県庁南別館駐車場に残る、水路を推定させる楠群



公用車車庫建設に伴う調査で発見した石垣(部分)



◀石垣の下部には沈下を防ぐため「はしご状胴木」を用いている



佐賀城分間御絵図 ()内は現在の建物



周辺見取り図

じっ けん ぼり がわ
十 間 堀 川

普通、お城の堀には「外堀」とか「内堀」と呼ばれるものがありますが、佐賀城の堀にはその名称がありません。また、お城の防備は「高い石垣や深い堀」というのが一般的ですが、佐賀城は平坦な土地に造営されていますので、「広い堀」に防衛機能を持たせています。それだけではなく、城の廻りには侍屋敷を配置し、その外に町家が造られ、さらにその北側に十間堀川が佐賀城の北約500メートルのところに東西方向に造られ、佐賀城の防備としました。この十間堀川がいわば佐賀城の外堀であり、佐賀城を囲む堀が内堀ということが出来ます。

十間堀川は、1間を1.81メートルとして換算すると約18メートルの川幅になります。ここが北から攻めてくる敵を食い止めるための第1の「備え」であり、川の南岸には土塁が平行して延々と築かれていました。また、十間堀川の北側には2つの寺院が築かれました。清心院と天祐寺です。これは、佐賀城から見て北東と北西の「鬼門」に当たり、佐賀城を災いから護るという思想もありますが、これらの寺が描かれている江戸時代の絵図をみると、周りを堀で囲み小規模な「砦」のようにもみうけられますので、陣屋的な役割を持たせていたものとも考えられています。また、この川は、佐賀江を經由して物資運搬のための水路としても機能していました。

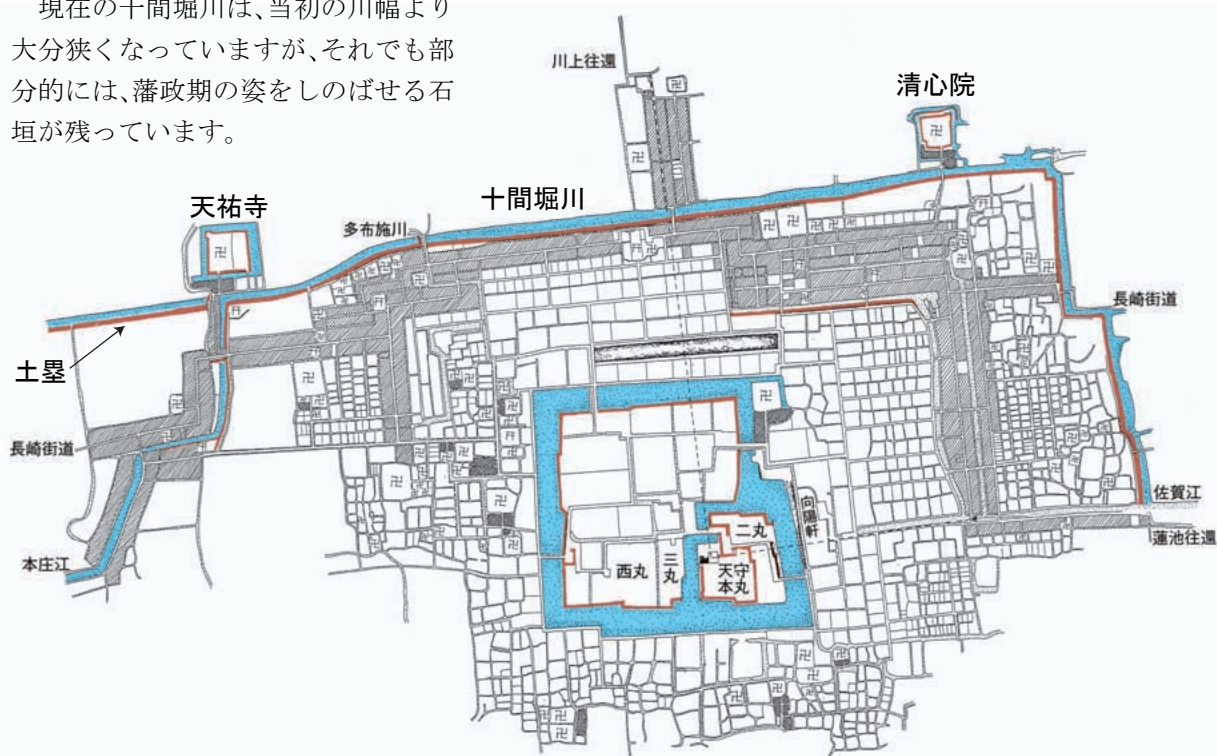
現在の十間堀川は、当初の川幅より大分狭くなっていますが、それでも部分的には、藩政期の姿をしのばせる石垣が残っています。



▲白山二丁目から西方をのぞむ



▲勸興公民館付近から西方をのぞむ



承応三年の城下町佐賀(「佐賀城廻之絵図」より)

佐賀城廻之絵図

佐賀市 17 歴史探訪

願正寺の時鐘

現代の私たちが時間を知るには、腕時計や街角の時計、最近では携帯電話の時刻表示を見るなどの方法があります。

江戸時代、城下町佐賀の人々は、どのようにして時刻を知ったのでしょうか。

佐賀城下では、佐賀城本丸の「時太鼓」で藩士の登城を知らせ、願正寺の「時鐘」で日常生活の時刻を知らせていました。

願正寺の「時鐘」は記録によると、元禄9年(1696年)の8月から始められ、藩庁から維持管理経費として米10石を支給されていました。

現在、願正寺にある鐘楼(鐘撞き堂)は明和5年(1768年)に再建されたもので、その建設経費は万人講(現在の宝くじのようなもの)の利益が充てられました。願正寺の「時鐘」は安政元年(1854年)まで佐賀城下の人々に時を告げていましたが、鐘の響きが悪くなったという理由で廃止され、その後は、白山の八幡宮(現在の龍造寺八幡宮)境内で撞くようになりました。

願正寺の鐘楼は、佐賀城堀の石垣に使われているものと同じ、「赤石」の切石積みの基礎の上に建ち、上層には欄干を巡らしている優美な建造物です。願正寺にいらっしゃった時には、「時の鐘」に思いをはせ、心の中で藩政期の音色を聴いて見ませんか。

一口メモ

・現在の「時間」は「定時法」であり、1年を通して、1時間は60分となっていますが、藩政期には「不定時法」が用いられており、季節や昼夜によって時間の長さが違います。ちなみに、夏至の昼間には一時(いっとき)が約2時間40分、冬至では約1時間50分ぐらいになっていました。(昼間の一時の長短に伴い、夜の一時の長短も変化する)

・願正寺では、時間の長さを知るために、「香番所」が設けられていました。ここでは線香の燃える速度で時間を計っていました。

・現在の鐘は、昭和24年に京都で造られたもので、毎夕5時には城下町佐賀に響いています。また、12月31日には一般市民の方でも、除夜の鐘をつくことができるそうです。



▲願正寺の本堂



▲鐘楼



▲鐘楼の「赤石」積みの基礎



至 片田江交差点▼

佐賀市 18 歴史探訪

きゅう こ が け いた ど

旧古賀家の板戸 (佐賀市歴史民俗館)

日頃見慣れている風景の中にも、何度も見なおしてみると、思わぬ発見をすることがあります。今回は、佐賀市柳町に所在する旧古賀家を取り上げます。

旧古賀家は、古賀銀行の頭取、古賀善平の住宅で明治17年に建築されたものです。明治期の実業家の住宅遺構として貴重な存在であり、隣接する旧古賀銀行、旧牛島家、旧三省銀行とともに、これまで整備・活用に努めてきたところです。

佐賀市歴史探訪10で高伝寺の板戸(杉戸)や^{ついたて}衝立が、「佐賀城の御^{ごてん}殿に使われていた可能性がある」ものと紹介しましたが、これと同様のものかもしれない板戸が、旧古賀家の1階大広間北側の押入と、2階廊下の押入にも使われています。板戸に描かれている絵は高伝寺にあるものと比べると、その保存状況は好ましいものではありませんが、猿・海・流水・人物などが両面に描かれています。

板戸絵は、両面に描かれている場合は、どちら側からも鑑賞できる箇所に用いられます。旧古賀家の板戸は、裏からは鑑賞できない「押入」に用いられていますので、どこかの建物からの「転用」と考えられます。

この板戸についての記録は何も残っていませんので、想像の域を出ませんが、もしかしたら、佐賀城の建物か重臣屋敷に使われていたのかも知れません。

旧古賀家を利用される際、探して見ませんか。



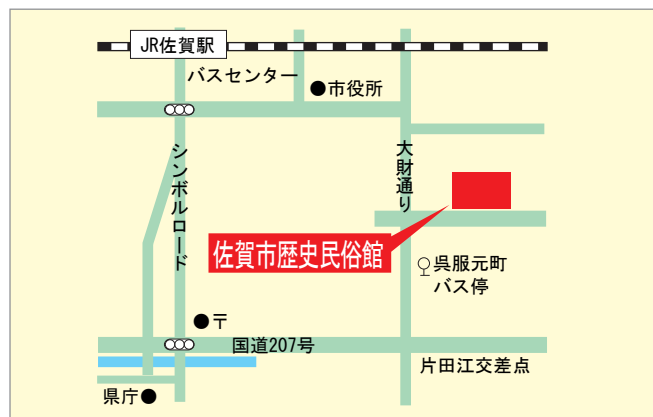
▲旧古賀家



▲旧古賀家1階にある板戸



▲旧古賀家2階にある板戸



佐賀市 19 歴史探訪

こ せ まち し ゅ り た ぐ ん ざ か い い し 巨勢町修理田の「郡境石」

今回は佐賀城下を少し離れたと思います。場所は巨勢町修理田の国道264号線沿いの「旧長崎街道」部分。佐賀市と千代田町の市町境に「従是 東 神埼郡、西 佐嘉郡」と書かれた「郡境石」があります。この標石の規模は20センチ角で、高さは2メートル弱。本来、旧長崎街道に近接していたものと考えられますが、現在は道から5～6メートル北に離れて建っています。

これがいつの頃の所産なのか、資料がなかったもので明らかにできませんでしたが、歴史の専門家の先生方で以下のような論議がありました。

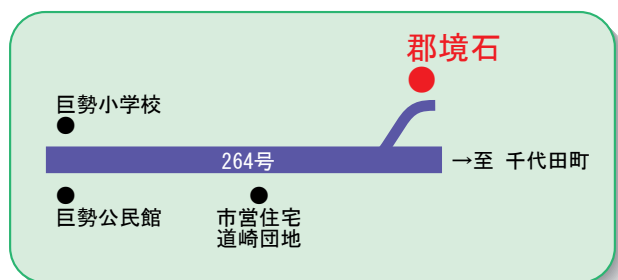
○「さが」を表記する際、「嘉」の文字が用いられているので、藩政期の所産の可能性はある。

○確実に藩政期の所産である「^{くにざかい}国境石」と、この「郡境石」の規模・形状に差があり、藩政期の所産でない可能性もある。

○仮に藩政期の所産とするならば、明治期に見られるような、強い「郡境」意識が藩政期にもあったのかどうか。

などなどの論議がなされましたが、結論は出ませんでした。

江戸時代のものであれ、近代のものであれ、旧長崎街道筋の歴史遺産として大切にしたいものです。



佐賀市 20 歴史探訪

おお たから せい どう あと 大財聖堂址

佐賀藩の藩士教育施設として最も早いものに、元禄4(1691)年、二代藩主光茂により設置された佐賀城内の二の丸聖堂があります。この地は、参詣するには不便であるとのことで、元禄13(1700)年、城外南西部の鬼丸の地に聖堂が移されました。これを鬼丸聖堂といいます。

二の丸聖堂や鬼丸聖堂は、いわば「佐賀藩立」のものですが、二の丸聖堂に遅れること3年の元禄7(1694)年には、民間による大財聖堂ができました。これは、佐賀藩の御用商人の系譜を引き、佐賀城下白山町の町人頭であった、武富市郎左衛門(成亮または廉斎)により建設されたものです。この聖堂の完成

に際して、三代藩主綱茂は孔子像を、支藩蓮池二代藩主直之は顔子像を、久保田邑主村田政盛は曾子像を寄贈しました。市郎左衛門は聖堂の傍らに、家塾「依仁亭」を設け、藩士や庶民に儒教を教えました。

この大財聖堂および家塾へは、藩からも援助がなされ、武富家の子孫によって経営されました。しかし、城下はずれで毎日の通学に不便なため、年を経るたびに学生数も減少し、天明年間には廃校寸前の状態であったようです。

現在、大財聖堂址周辺は住宅地となり、その場所は不明確となっていますが、街角に立っている「大財聖堂址」の石碑と、橋に残る「廉斎(れんさい)」の名前だけが、当時をしのぶことのできる、数少ない痕跡です。



▲多久市西蹊公園に移設された「大宝聖林碑」



▲大財1丁目にある「大財聖堂址」の碑

一口メモ

・大財聖堂の所在を示していた「大宝聖林碑」は、現在多久市の成蹊公園にあります。昭和28年ごろ大財から多久に移設されたそうです。

・聖林の碑は、石碑を亀が背負っている様式となっていますが、これを「亀趺」といいます。古代中国にその初源があり、記念碑や墓碑として用いる例が多いようです。佐賀市域では、万部島の佐賀の役記念碑に用いられています。



▲万部島 佐賀の役記念碑



至片田江交差点

佐賀市 21 歴史探訪

こう こう ねん あ み だ じ 洪 浩 然 と 阿 弥 陀 寺

「^{こぶこうねん}瘤浩然」という言葉をご存知でしょうか。これは豪快で節くれだった書をなすことで有名な「洪浩然」(1582～1657)の異名です。彼は16世紀後半、豊臣秀吉の「文禄・慶長の役」で普州^{ふしゅう}において12歳で孤児となり、朝鮮国に出兵していた鍋島直茂によって佐賀に連れてこられた人です。

鍋島直茂・勝茂親子は浩然の才覚を愛し、佐賀藩士に召抱え、京都に遊学させ、帰藩後はそば近くに置きました。

洪浩然は、李三平など佐賀に来た朝鮮半島からの人々との結びつきの強い、多久家の家臣の娘と結婚し、名実ともに佐賀藩に根をおろすことになりました。

明暦3(1657)年、佐賀初代藩主勝茂は江戸で亡くなりますが、36人が勝茂^{じゅんし}に殉死しました。洪浩然はその中の一人で、彼の殉死の場所は佐賀市木原にある阿弥陀寺でした。殉死といっても異国での死は彼にとってどんな心境だったのでしょうか。

洪浩然の墓は、境内東側にあり、その一族の墓と並んで建っています。この地をお訪ねの際には、洪浩然の波瀾万丈な人生を想ってみませんか。

洪家はその後、佐賀藩士として重要な役割を果たしました。



▲阿弥陀寺全景



▲洪浩然の墓



▲洪浩然の書(佐賀県立名護屋城博物館所蔵)

一口メモ

・この頃、主君の後を追う「殉死」は全国的になされたものですが、勝茂への殉死以後、佐賀藩では幕府にさきがけて殉死を禁止しました。寛文2(1662)年10月のことです。江戸幕府は遅れること約半年の寛文3(1663)年の5月、殉死を禁止しました。

・洪浩然関係の資料は、佐賀県立名護屋城博物館で収集・保管がなされています。同館をお訪ねの際にご覧になってください。



佐賀市 22 歴史探訪

つ い じ は ん し ゃ ろ し ゅ す い ぜ き あ と 築地反射炉の取水堰跡？

築地反射炉は、嘉永3（1850）年に完成したわが国最初の西洋式溶解炉で、日新小学校敷地を中心とした範囲に所在したものとされています。

反射炉建設の契機は、フェートン号事件などの反省とアヘン戦争の情報などから海防意識が高揚し、時の藩主鍋島直正を中心に、蘭学研究に力を注がれたことによるものです。その結果、全国に先がけて反射炉を建設しました。反射炉というのは鉄を大量に、効率よく溶解する施設のことです。この反射炉で大砲を造り、長崎の防衛を図りました。

大砲を造るには、高度な溶解技術だけでなく、砲身^{あな}に孔をうがつ技術も必要です。佐賀藩では、この技術の「動力」に水力を用いました。天祐寺川^{せき}に堰を設け、そこから小水路に水を引き、水車を回しました。この水車の回転運動を利用したのです。

現在、「築地の反射炉」本体や水路、水車小屋などの施設の位置関係は分からなくなっていて、日新小学校敷地や民家となっていますが、天祐寺川の形状だけは、往時のものとそれほど変わっていないようです。

ある研究者が、この天祐寺川の水中に切石群を見つけ、反射炉時代の「取水堰」ではないかと提言されました。その位置は日新小学校敷地の北東部で、川沿いに水門を有する小水路が現存していて、水中の切石群はその東に位置しています。位置関係から判断すると、反射炉時代の堰である可能性もあるかもしれませんが、水中のことでもあり、調査するのも困難なため、断定しづらい状況です。当否は専門家による今後の研究によるとしても、河川改修などの工事が計画される場合には配慮すべきものと思います。

一口メモ 取水堰以西の水路推定地の調査

平成21年8月に、日新小学校敷地の水路推定地の埋蔵文化財確認調査が行われました。

その結果、浅い溝が一条検出されましたが、区画のための溝であり、流水を伴うものではありませんでした。



▲日新小学校敷地に隣接する
「築地反射炉」の模型



▲日新小学校敷地から、東方の
天祐寺川につながる小水路



▲取水堰跡

佐賀市 23 歴史探訪

「龍護寺跡」の長尾家墓所

佐賀大学医学部と鍋島中学校とのほぼ中間にある「鍋島区画記念公園」南西部に隣接する「長尾家墓所」の由来をご紹介します。

同記念公園は、今から約18年前に整備されたものですが、鍋島土地区画整理事業の際、「龍護寺の墓所」も整理事業地区内に所在していました。

当時、龍護寺はすでに廃寺となっており、荒れた墓地だけが残っていました。区画整理事業実施に先立ち、調査を実施した結果、佐賀藩の儒学者であり殖産興業にも尽力した長尾矢治馬（東郭）一族の墓所であることがわかりました。

長尾矢治馬は、安永7（1778）年、干拓による新田開発を藩に献策しました。その内容は「藩財政が窮乏しており、その解決策として与賀・川副・嘉瀬・白石方面の埋め立てをしたい。10年で6千町の新田を開き、約3万石の増収が見込まれる。経費は万人講（現在の宝くじのようなもの）の利益を充てる。」というものでした。矢治馬の献策は認められ、「搦方附役（＝干拓担当者）」を命じられました。

この干拓による新田開発で、佐賀藩の収益は増加し、財政立て直しの基幹のひとつとなりました。

長尾一族の墓所は、同公園南西部の隣接した所に移設・整備され、説明板も設置されています。周辺においでの際は、ぜひ、お訪ねください。

一口メモ

・矢治馬の養子、長尾道助（文恭）は、天明元（1781）年、佐賀藩校弘道館が創建されると、古賀精里や石井鶴山などとともに儒学を教えました。

・江戸時代初期、佐賀藩は幕府より36万石の領地を承認されました。そのときの石高を「表高」といい、江戸時代を通じて変化することなく、大名家の「格式」を表すものになりました。これに対して、実際の石高を「実高」といいます。佐賀藩は盛んに干拓が行われたので、実際の石高は90万石とも100万石ともいわれています。



▲昭和61年12月ごろの龍護寺墓地



▲鍋島二丁目に移設された墓地（外）



▲鍋島二丁目に移設された墓地（内）



佐賀市 24 歴史探訪

えとう しん ぺい れん じょう じ 江藤新平と蓮成寺

江藤新平は、明治政府で文部大輔^{たいふ}(次官)、左院副議長^{しほうきょう}などを歴任し、明治5(1872)年には初代司法卿として、近代国家にふさわしい司法制度の整備に尽力した人です。明治6年4月には参議となり、明治新政府の運営に参加しましたが、「十月の政変」で西郷隆盛らと共に職を辞し、明治7年2月、佐賀藩士族に擁立され、征韓党首として、佐賀の役で政府軍と戦って敗れました。

現在、江藤新平の墓^{ほんぎやうじ}は、本行寺にあります。初めは鍋島町の蓮成寺に葬^{ほうむ}られました。このときのことを、江藤新平の孫にあたる江藤冬雄氏著^{なんぶく}『南白江藤新平実伝』では、「…家永、浦、中村の3人に協力、南白の遺骸^{いがい}を棺に納め、佐賀城の北西約1里、江藤家の菩提寺、鍋島村木の角在、蓮成寺に運び、山門を潜^{くぐ}ってすぐ左手、現在、三十六番神(三十番神の誤記か)を祀^{まつ}ってある所に鄭重に葬^{ていじやう}った。」とあります。

また、『佐賀市史第3巻』には、人々の江藤新平に対する信仰があったと記されています。その内容を明治期の文書に見てみると「…亡江藤新平ノ霊ニ祈ル時ハ諸病ヲ治シ、…中略…亡江藤新平ノ墓所ハ佐賀ヨリ一里隔ル木ノ津野(角)村蓮成寺ニアリ、素ヨリ寂寥タル僻地^{へきち}ノ由、然ルニ連日多人数参詣スルコト故ニ商人ハ寺内ニ菓子或ハ果物ノ店ヲ出シ寺中俄カニ繁盛セリ…」(フリガナを除き原文のとおり)とあります。

本行寺に改葬^{かいさう}されたのは、明治14(1881)年のことで、墓碑銘は副島種臣によるものです。墓碑には「明治十有四年5月建 江藤新平君墓 菅原種臣書」と刻まれています。

人々の「敬慕の念」が、信仰や伝説を形成していくことがありますが、当時の佐賀の人たちは江藤新平の御霊^{みたま}に何を期待していたのでしょうか。

一口メモ

江藤冬雄氏の記述には、「新平が最初に葬られたところは、『三十番神』のお堂があったところ」とありますが、蓮成寺の御住職によりますと、『三十番神』のお堂は、この寺に古くからあったもので、その位置に新平の墓を建てたとは考えがたい。(1)『三十番神』のお堂に仮安置(2)本堂西側の江藤家墓所に埋葬(3)明治14年に本行寺に改葬という順序ではないか。」とのことです。



▲蓮成寺



▲蓮成寺 三十番神堂



▲本行寺
江藤新平の墓



▲本行寺

佐賀市 25 歴史探訪

こう でん じ だい ね はん ぞう 高伝寺の大涅槃像

高伝寺は、鍋島直茂の父、清房により天文21(1552)年建立された曹洞宗寺院で、山号を恵日山といいます。それ以来、佐賀鍋島家の菩提寺として今日まで続いている由緒あるお寺です。

境内は、約33,000㎡の広さで、本堂西側の墓所には歴代藩主や龍造寺氏の墓石が林立し、一大景観をなしているとともに、同寺は、重要な歴史遺産や県指定・市指定の文化財を多数保管されている所でもあります。

今回は、佐賀市指定文化財「大涅槃像」を中心に紹介します。

大涅槃像は、京都東福寺にある兆殿司筆涅槃図を模写したもので、宝永3(1706)年に完成したものとされています。これは、紙本彩色で、描表装を含めると縦15.2m、横6mの巨大な画幅です。写真1にあるように、高伝寺で公開される際には、その大きさのため、一部は本堂畳上に広げざるをえません。

この大涅槃像が、佐賀県立博物館による全体写真撮影のため、県立総合体育館で写真2のように広げられたことがあります。壁際につるしての写真撮影も検討されたとのことですが、画幅の重量を考えると、その保存に好ましくないとのことで、床に展開し、直上からの写真撮影が行われました。

高伝寺では、毎年4月19、20日に「釈迦堂御開扉」が行われ、釈迦堂や大涅槃像の公開が行われます。

高伝寺の歴史遺産を実見し、佐賀の歴史・文化の奥深さを感じてみませんか。



1. 佐賀市重要文化財 大涅槃像



2. 平成7年に県立総合体育館で行われた写真撮影



3. 佐賀県重要文化財 高伝寺釈迦

一口メモ

- ・大涅槃像の詳細や写真撮影のことは「葉隠研究第45号(葉隠研究会発行)」に詳しく紹介されていますので、ご一読ください。佐賀市立図書館にあります。
- ・平成20・21年度には、九州国立博物館で大掛かりな修復が行われました。



高伝寺にある佐賀市指定の文化財



高伝寺墓所



高伝寺の梅



御位牌所



鍋島忠直坐像

佐賀市 26 歴史探訪

た しろ つら もと けん しょう ひ ずい りゅう あん 田代陣基顕彰碑と瑞龍庵

田代陣基は、「葉隠」の筆録者として知られています。陣基は、佐賀藩士田代小左衛門宗澄の子として、延宝6(1678)年佐賀に生まれました。元禄9(1696)年、19歳のときから、3代藩主綱茂、4代吉茂のもとで祐筆役ゆうひつやく(※)として仕えましたが、宝永6(1709)年に、理由は分かりませんが御役御免となりました。

山本常朝との出会いは、その翌7年のことで、以来7年間の歳月を経て「葉隠」を完成させました。陣基は、その後享保16(1731)年、54歳のとき、5代藩主の宗茂の時代に再び祐筆役になりました。

陣基は、寛延元(1748)年、71歳で没し、佐賀市田代の瑞龍庵に葬られました。墓碑には「松盟軒期醉之墓」と刻まれています。その後、彼の墓はどこにあるのか、人々から忘れ去られてしまいましたが、昭和19年に発見されました。

この発見を記念して、有志により碑が瑞龍庵に建てられました。その碑文には「田代陣基先生葉隠纂述記念之碑」と刻まれています。「陣基」と「陳基」。似て非なる文字であり、刻み間違いかと思われる人がいるかもしれませんが、漢和辞典を引くと、「陣」は「陳」の俗字であり、陣は戦乱などの際に用いるとあります。昭和19年に顕彰碑を建立する際、田代陣基への思いを込めて、本来の字を使用したものと思われます。

田代陣基は、山本常朝同様、葉隠を語るときにはなくてはならない人です。佐賀の「歴史的精神的遺産」である「葉隠」に接したいと思うときには、この瑞龍庵も訪ねてみませんか。

※祐筆役…藩の文書事務を担当した役職。



▲田代陣基の墓



▲墓碑の隣にある記念碑

▲「田代陣基先生」と刻まれています。

一口メモ

瑞龍庵の入口にも田代陣基の墓があることを示した石柱が建っており、ここにも「陣基」は「陳基」と刻まれています。



瑞龍庵入口の石柱



佐賀市 27 歴史探訪

こう ごと いし なぞ 神籠石の謎

西日本各地に点在する「神籠石」の一つである帯隈山神籠石(久保泉町川久保に所在し、一部は神埼町にまたがっています)は、脊振山南麓から派生した帯隈山を中心に幾つかの山(天童山、鳥越山、清兵衛山、桃山)と谷を取り込みながら、方形に切り出した花こう岩を列状に並べ、総延長2.4kmにわたって環状に巡らした巨大な遺跡です。昭和16(1941)年に発見され、昭和26(1951)年に国史跡として指定を受けました。

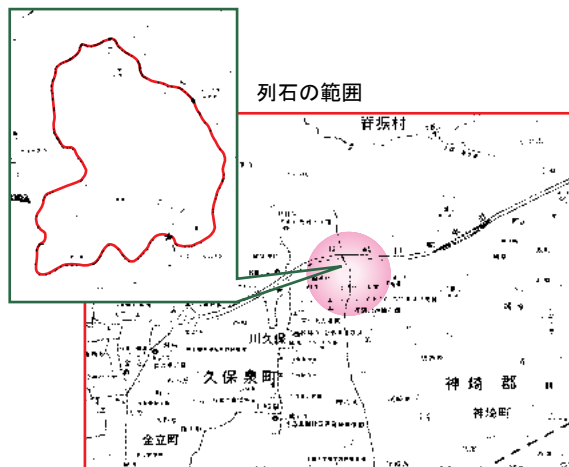
この「神籠石」とは、いつ、誰が、何のために造ったものなのでしょうか。

「神籠石」という名称は、その名の通り、「神が籠る石」として、列石で囲まれた内部を神聖な場所と考えたことに由来しており、学界に初めて紹介されたのは明治31(1898)年のことです。その神域説の発表後すぐに山城説も唱えられ、大正、昭和期に至ってもその性格については論争が絶えませんでした。しかし、昭和30年代から各地で行われた発掘調査により、列石が土塁の基礎の一部であることが判明したため、現在では山城説が有力となっています。

帯隈山神籠石の発掘調査は昭和39年から平成11年までに4回が行われました。その結果、山城説を裏付けるように列石・土塁・柵列などが確認されただけでなく、神籠石の築造年代は6世紀末以降であるとの重要な知見も得られています。

さて、築造目的や時期などについては、これまでの各地の発掘調査や文献研究の成果によって、天智天皇4(665)年に築城されたと考えられる福岡県の大野城や佐賀県の基肄城などの山城よりも以前に、對外防衛を目的として国家主導で造ったという説が主流となっています。ただ、資料そのものがまだ少ないこともあって、決定的な手掛かりは今のところ得られておらず、定説化するまでには至っていません。

「神籠石」の全容が明らかになるまでには、まだまだ時間がかかりそうです。



▲帯隈山を望む



▲平成11年度に発見された神籠石列石

一口メモ 古代の山城や神籠石の築造には、7世紀頃の唐・新羅・百済・日本を取り巻く紛争状況が深く関係しているのではないかと多くの研究者が考えています。また『日本書紀』の中に書かれている当時の情勢(白村江の戦い(663年)など)や防備に関連する記事は、神籠石研究上非常に重要視されています。

・帯隈山神籠石の南域には、国天然記念物である「エヒメアヤメ」の自生地があります。毎年桜の開花の頃に、小さいながらも紫色の可憐な花を咲かせます。開花時期には地元の方々による「エヒメアヤメ祭り」も開催されますので、神籠石の見学とあわせて一度訪ねてみてはいかがでしょうか。



佐賀市 28 歴史探訪

さが じょう ほん まる あと だん がん 佐賀城本丸跡の弾丸

佐賀城本丸歴史館建設に伴う平成11年の発掘調査において、「椎の実」型の弾丸が発見されました。

「外御書院」と呼ばれる建物跡の南側で発見された弾丸は、全長2.7cmほどで、お尻の部分には深さ1cmほどの円錐形の穴があります。この弾丸は、イギリスで開発されたエンフィールド銃の弾丸と考えられます。エンフィールド銃(古文書にはエンピール銃とあります)は、幕末期に佐賀藩を初めとした有力な藩が当時の上海から大量に輸入していたようで、明治に入ってから政府軍で使われていました。

今回発見された弾丸は、幕末当時の佐賀藩のものか、明治7(1874)年の「佐賀の乱」に由来するものか、どちらかと思われませんが、どちらともはっきりとはいえません。

「佐賀の乱」では、2月16日未明から18日午前まで、当時の県庁であった佐賀城本丸に立てこもる政府軍と、これを攻める佐賀軍との間で激しい銃撃が交わされました。本丸への出入口である「鯨の門」の門柱には、佐賀軍が撃ち込んだといわれる弾丸の跡が残っています。なかには鉛片がめり込んだままのものもあります。エンフィールド銃は佐賀軍でも使用されていたようなので、その弾丸なのかもしれません。



▲エンフィールド銃(佐賀県立博物館蔵)



▲本丸跡出土の「椎の実」型弾丸(佐賀県教育委員会蔵)

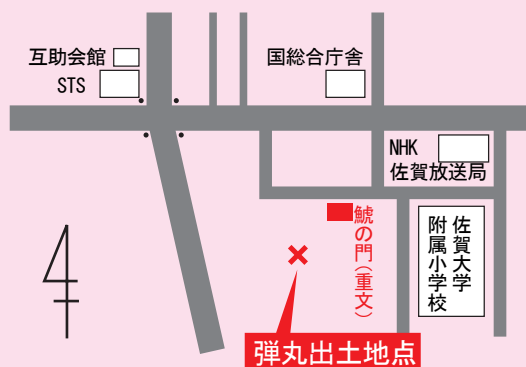


▲「鯨の門」門柱の弾痕

一口メモ

エンフィールド銃は、弾を銃口から詰める先込め銃です。しかし、同じ先込め銃でもパチンコ玉のような丸い弾丸を使う火縄銃やゲバール銃などより、はるかに遠くまで弾が届き、命中精度も高いものでした。その秘密は「椎の実」型弾丸のお尻の穴が発射ガスを受けて広がり、銃身の溝(ライフル)に噛み込んでスピンがかかる仕組みになっているからです。幕末当時では、エンフィールド銃よりさらに進んだ元込め銃が最新式でした。

佐賀城本丸跡周辺見取図



佐賀市 29 歴史探訪

さがけん さいこ じん こつ ひがしみよう い せき 佐賀県最古の人骨と東名遺跡

国土交通省により金立町に巨勢川調整池が建設されましたが、その中にある東名遺跡の調査で、佐賀県内で最も古い人骨が発見されました。頭から足まで、全身の形が分かるものが5体分あり、周辺の状況から約7,000年前(縄文時代早期)の人骨であることが分かりました。いずれも当時の特徴である屈葬(※)の状態で見られ、集落の一面に埋葬されていました。日本の土壌は酸性が強く、骨などは残りにくいのですが、この人骨の場合は、水分の多い粘土層で外気から遮断されていたことなどから例外的に残ったものと考えられます。

東名遺跡は、平成5年から8年にかけて実施された発掘調査によって、標高3m程の低地に立地する縄文時代早期(約7,000年前)の集落跡であることが分かりました。多くの土器や石器などが出土し、調理などに使用された炉の跡が150基以上も発見されました。出土した土器のほとんどは鹿児島を起源とする「塞ノ神式土器」(※)と呼ばれるもので、これだけ多量に見つかったのは北部九州では初めてです。

九州における縄文時代早期の遺跡は、鹿児島を中心とした南九州に多く、鹿児島が当時の文化の中心地であったと考えられています。大規模な発掘調査が行われた上野原遺跡(鹿児島県国分市)では、塞ノ神式土器をはじめとした多量の土器とともに、佐賀県多久市周辺でとれる石材を用いた石器が数多く出土しています。

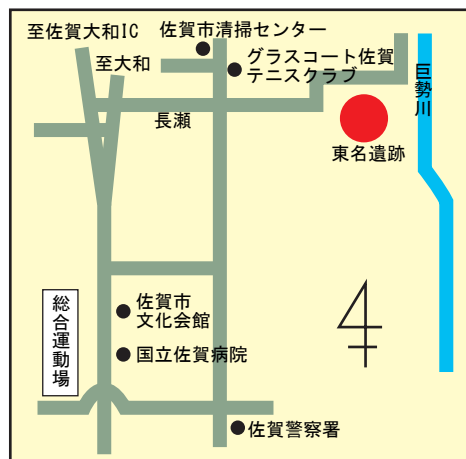
鹿児島起源の土器が佐賀で、佐賀産の石材を使った石器が鹿児島で発見されていることから、両地域は、有明海などを介し交流があったことが十分考えられます。東名遺跡で出土した人骨は、こうした交易に携わった人々だったのかもしれません。

※屈葬…手足を折り曲げて葬ることからこう呼ばれています。霊が迷い出ないようにして埋めたとか、再生を祈って胎児のように埋めたなどという説があります。

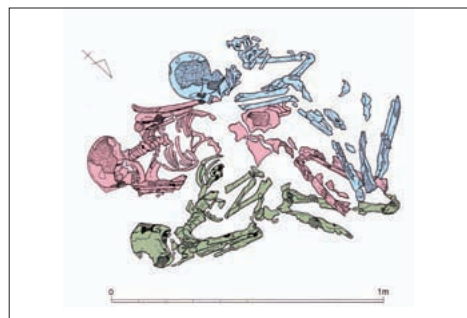
※塞ノ神式土器…鹿児島県の塞ノ神遺跡で初めて発見され、この名が付けられました。円筒形のバケツのような器形で、赤貝などの2枚貝や、より糸を転がして文様を付けています。

一口メモ

東名遺跡から出土した人骨の中には、3体同時に埋葬されたものがありました。病気や事故などによって、同じ時に亡くなったためと考えられます。いずれも北東方向に顔の正面を向け、横向きに葬られていました。



東名遺跡の位置図



▲3体同時に埋葬された人骨



▲塞ノ神式土器



▲炉の跡

佐賀市 30 歴史探訪

しら ひげ じん じゃ でん がく 白鬚神社の田楽

「田楽」は、田植えの時に調子を合わせて鼓舞する農耕儀礼として平安時代に生まれ、鎌倉時代にかけて娯楽的な芸能として発達し流行しました。後から成立した「猿楽」^{さるがく}とともに「能」の原型となりましたが、室町時代には芸能としての主役の座を能に奪われました。現在の田楽は、祭礼として、また伝統芸能として、全国でも数少ない地域でしか残っていません。

そうした今に伝わる数少ない田楽の一つに、久保泉町川久保の「白鬚神社の田楽」があります。佐賀県内に残っている田楽はこれだけで、九州内にもほとんどなく、国の重要無形民俗文化財に指定された貴重なものです。記録に現れるのは江戸時代中ごろからですが、起源は平安時代にさかのぼるものと考えられています。

「白鬚神社の田楽」は、太鼓と笛の演奏に合わせて、あでやかな化粧を施した少年が「ささら」^{ちごでんがく}（編木）と呼ばれる楽器を緩やかに鳴らす動作が主体となります。この点から珍しい「稚児田楽」^{ちごでんがく}の一つとされています。同じ伝統芸能でも勇壮な浮立^{ふりゆう}などと比べると、単調な動作の繰り返しに感じられるかも知れませんが、その点が逆に雅な平安朝の雰囲気を感じさせます。

平安時代には佐賀平野の各地で新たな荘園の開発が行われました。「白鬚神社の田楽」も、川久保周辺で始まった荘園の開発とともに、この地に伝わったものかも知れません。

一口メモ

脊振山系南麓から流れ出る巨勢川のもと、久保泉町大字川久保字宮前に白鬚神社はあります。白鬚神社は、継体天皇の御代、近江国白鬚大明神の分霊を移したものと伝えられ、古くから村の鎮守として川久保の人々に親しまれてきました。毎年10月18・19日に秋の例祭典が行われ、その時に川久保の人々によって奉納されるのが、「白鬚神社の田楽」です。



あでやかな化粧を施した少年▶



▲「ささら」をふって鳴らす動作



▲白鬚神社



佐賀市 31 歴史探訪

つ い じ は ん し ゃ る あ と ふ く げ ん て つ せ い た い ほう 築地反射炉跡の復元鉄製大砲

佐賀市立日新小学校の片隅、築地反射炉の記念碑のそばに、^{ちゅうてつ}鑄鉄製大砲24ポンドカノンの復元品が据えられています。これは東京に1門だけ現存していた佐賀藩所有といわれていた大砲を忠実に復元して昭和52年に製作されたもので、県立博物館のテラスにも同じものがあります。

佐賀藩は主として長崎防備のため、築地^{たふせ}と多布施の2カ所に反射炉を建設し、多数の24ポンドカノンや36ポンドカノンを鑄造しました。それは幕末近くになって日本近海に出没するようになった黒船(外国船)の脅威に対抗するためです。黒船を打ち払うためには多数の大砲がいる、鑄鉄製大砲を作るためには反射炉がいるということで、佐賀藩以外でも各地で反射炉建設が計画されました。

これらの反射炉は全て、1826年にオランダで書かれた『ロイク王立鉄製大砲鑄造所における鑄造法』という1冊の本を教科書として建設されています。そのなかでも、佐賀藩の築地反射炉は最も早い嘉永3年(1850)に操業し、後に建設された多布施反射炉は最も多くの大砲鑄造に成功しました。

オランダ語による解説とわずかな図面だけで、反射炉建設という大事業に挑んだ各地の技術者たちの苦闘は想像を絶するものがあつたでしょう。にもかかわらず、安政6年(1856)に幕府が外国からの武器購入を許可すると、こうした反射炉に対する情熱はにわかに冷めてしまったようです。佐賀藩の2カ所の反射炉も安政年間以降は、いつまで操業が続いたのかよく分かっていません。赤さびた24ポンドカノンはそうした歴史を教えてください。

一口メモ

オランダの1820年代の技術で鑄造された24ポンドカノンは、球形の砲弾を先込めするもので、幕末ですでに旧式化していました。後に佐賀藩がイギリスから購入したアームストロング砲は、当時としては最新式の元込め砲で、戊辰戦争では大きな威力を発揮し、「佐賀の大砲」として恐れられました。



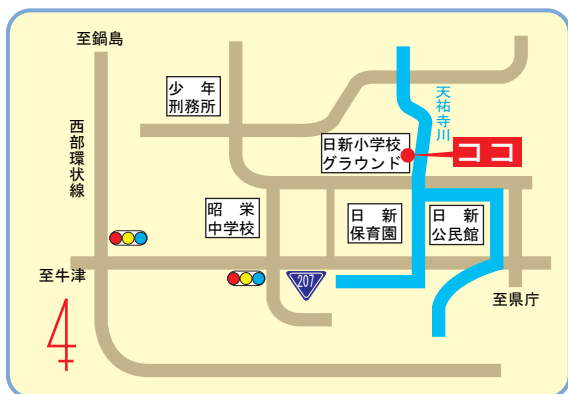
▲築地反射炉跡の記念碑



▲復元24ポンドカノン



▲県立博物館の24ポンドカノン



佐賀市 32 歴史探訪

たか ぎ じょう あと 高木城跡

高木八幡宮の北西約150m付近に『高木城址』と刻まれた碑が建っているのをご存じでしょうか。現在は住宅街となっているため、城としての面影はほとんど残っていませんが、この一帯は、平安時代の終りごろから戦国時代にかけて、現在の佐賀郡大和町から高木瀬町を本拠として勢力を誇っていた高木氏の居城があったとされている場所です。

高木氏は藤原氏を祖とし、代々大宰府や肥前国の役人として次第に勢力を伸ばし、その一族が領地の一つであるこの地域で生活するようになり、支配力を強めるための拠点として高木城が築かれたと考えられます。

高木城は、平安時代末期の久安元年(1145年)に築城され、天文23年(1554年)に龍造寺氏との争いに敗れ、やがて廃城になるまでの約400年間存続したとされています。しかし、その正確な位置や規模などについては記録がなく明らかではありません。

ただ、当時の城は、雄大な天守を持つような立体的な城ではなく、主屋や付属する建物、そして溝(堀)などで構成された平面的な「館」であることが最近の研究成果で明らかにされており、高木城もそのような形態のものであったと考えられています。

近年、高木城推定地内の一画で発掘調査が行われ、高木城が存続していた時代のものと考えられる建物跡や井戸跡が発見されました。現在のところ断定するまでには至っていませんが、これらは高木城に関連する施設の一部である可能性が高く、文献などでは得られなかった高木城の様相はこれら考古資料により、わずかですが明らかにできそうです。

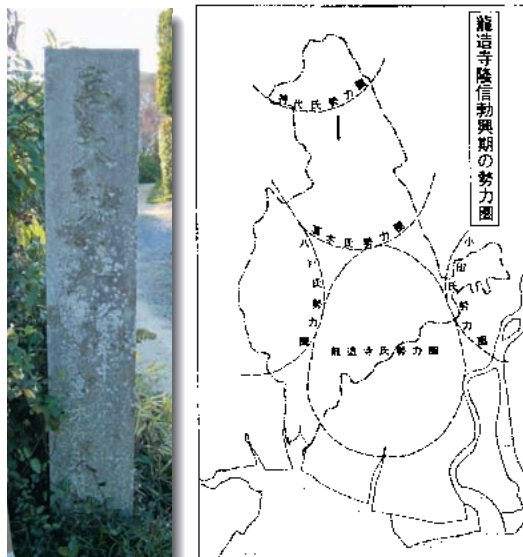
一口メモ

高木城跡の周辺には、高木氏により創建された高木八幡宮や菩提寺とされる正法寺があります。また、今も残る「寄人」

(領主に仕え雑役を勤めた農民)や「館橋」などの地名にその面影をしのぶことができます。



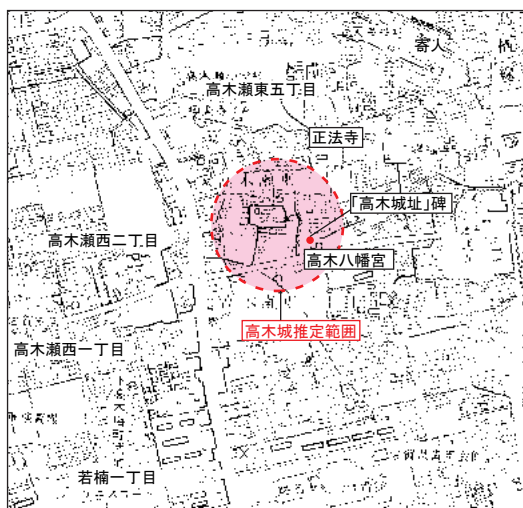
正法寺



▲「高木城址」碑



▲高木八幡宮



高木城跡周辺見取図

佐賀市 33 歴史探訪

見島のカセドリ行事

「ザッザッザッザッ、ザッザッザッザッ……」

かせどりが打ち鳴らす力強い竹の音。鳥の飛び立つ勇ましい羽音にも似た、この迫力のある打音が静かな夜の見島に響きます。

今回は、佐賀市蓮池町見島の集落に伝わる小正月の民俗行事をご紹介します。

この行事、現在は毎年2月の第2土曜日の夜に行われていますが、以前は2月14日(旧暦1月14日)に行われていました。

入念な準備を経て、当日は午後7時頃から熊野神社にて始まります。行事の主役は、蓑・笠を身にまとい、顔には白手拭いを巻き、手には先端半分を細かく割った長さ1.7mの青竹を持った「かせどり(加勢鳥)」と呼ばれる青年2名です。まず、雄雌の「かせどり」は鳥居から拝殿に走り込みます。両膝を付き、体を前にかがめて竹を床面に小刻みに激しく打ち鳴らしながら、盃に注がれた酒をそのままの姿勢で飲み干し、また同じ所作を続けます。謡のあと最後の所作が終わると、竹を打ち鳴らしながら鳥居へ駆け戻ります。

神社での行事が終わると、かせどり2名に加え、提灯持ち2名、天狗持ち2名、御幣持ち1名、籠担い数名で集落内の各家庭(氏子)を回ります。神社での所作と同じようにかせどりは家々に飛び込んで竹を激しく打ち鳴らし、出された茶や酒を飲み干して走り去りその後に籠担いがお祝儀をもらい受けます。すべての氏子を回り終えると熊野神社に集まり皆で飲食しながら歓談し、行事は終わるのです。

さて、このカセドリ行事の由米については明確な資料が残っておらずはっきりしません。蓮池鍋島家初代藩主鍋島直澄が、紀伊の熊野三所権現から分霊を受けて、今の場所に熊野神社を建立した後、寛永年間(1624~1644年)ごろから続いていると地元では伝えられています。

小正月の夜に、家々の門戸を訪れて音響を鳴らすというような習俗は全国にあり、例えば東北地方の「ナマハゲ」もこれに類するものです。見島では、訪れる神「かせどり」が打ち鳴らす音によって厄をはらい、その一年の幸福を期待したものと考えられ、県内には他に伝承されていない「神人訪問」の伝統行事として非常に価値の高いもので、平成15年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。一度ご覧になってはいかがでしょうか。



▲カセドリ行事の始まり



▲拝殿でのカセドリ行事



一口メモ

見島の集落より西方の蓮池町西名には宗眼寺があります。曹洞宗寺院で、佐賀藩蓮池鍋島家の菩提寺です。初代藩主直澄の霊屋にある「木造河童像」は佐賀市重要有形民俗文化財に指定されています。



佐賀市 34 歴史探訪

かみ いずみ い せき しゅつ ど が とう 上和泉遺跡出土の瓦塔

瓦塔は、古代寺院などにみられる木造の仏塔をモデルとして造られたやきもので、奈良時代ごろから製作が始まり、平安時代に最も多く造られましたが、室町時代には衰退していきました。その用途については、経巻きょうかんや宝器ほうきなどを納めた厨子ずしとしての機能、木造塔が倒壊した後に用いられた代用品としての機能、覆屋おおいやなどの建物に安置された信仰の対象としての機能などが代表的な見解ですが、全国的に出土数が少ない考古遺物の一つであるため、不明な点が多いことも事実です。

上和泉遺跡で出土した瓦塔は、県内で初めての出土例です。奈良時代終わってから平安時代初め頃にかけての遺構から破片が折り重なった状態で出土し、破片をつなぎ合わせると、初重軸部しよじゅうをほぼ完全に復元することができました。一つの重じゅうのみであっても、これほど残存程度が良い瓦塔は九州でも少なく、大変貴重なものです。

今回出土した初重軸部の高さは約38cmです。全体の高さは2m程度になると推定され、これはちょうど人が軽く見上げる程度の高さになります。木造塔と比べると表現は簡略ですが、屋根を支える組物くみものや柱なども表現され、柱の表現から方三間の建物ほうさんげんを表し、表面には朱の痕跡がみられます。このように瓦塔はやきものであると同時に、ミニチュアの建築物としての側面をもっています。

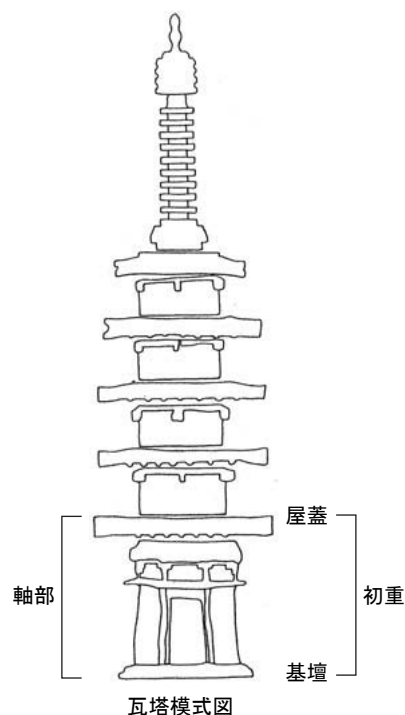
この瓦塔の出土は、当時の遺跡が数多く発見されている久保泉町上和泉周辺での仏教信仰の一端をうかがうことができる考古遺物ですが、寺院や建物内からの出土ではないためその用途は不明です。何のために誰が使っていたのか、謎のままなのです。

一口メモ

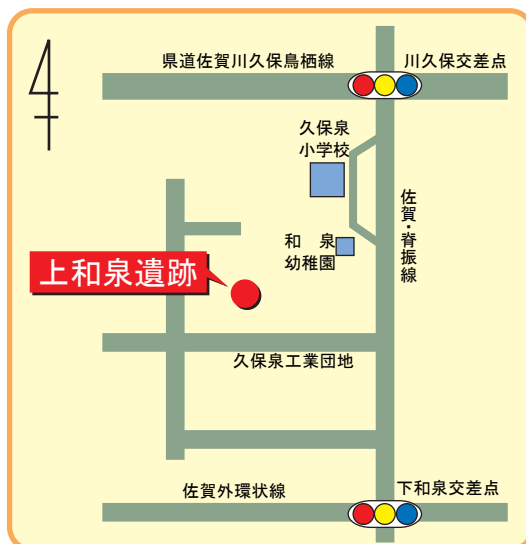
- ・今回紹介した上和泉遺跡の瓦塔は、佐賀市大和町の肥前国庁跡に保管しています。
- ・同資料館では国庁跡のガイダンス展示のほか、他遺跡からの出土遺物もトピック展示しています。



上和泉遺跡出土の瓦塔(初重軸部)



瓦塔模式図



佐賀市 35 歴史探訪

いにしえのドングリ

佐賀県立博物館の屋外展示場に大きく茂った一本の「アラカシ(※)」の樹。一見何の変てつもない樹のようですが、実は、この樹が縄文時代からおよそ四千年の時を経て私たちの眼前に現れたという、古代ロマンあふれる由来の樹であることをご存じでしょうか。

昭和42年(1967年)に佐賀県西有田町で「坂の下遺跡」の発掘調査が行われ、「アラカシ」の実が大量に出土しました。持ち帰った実をガラス容器に入れ保管していたところ、そのうちの 하나가翌年突然発芽したというのです。当時、四千年の眠りからさめた「縄文アラカシ」として全国的に大きな話題となりました。

では、なぜ大量のアラカシが出土したのでしょうか。

実は、アラカシの実をはじめ、いわゆるドングリなどの堅果類は、クリやクルミとともに縄文時代において重要な食糧源でした。秋に拾い集められたドングリは、地面を掘って造った「貯蔵穴」という施設に、生のまま一時的に保管され、必要に応じて食べられていたのです。

ドングリをはじめとする植物質の食糧は調達しやすい上に高カロリーの食べ物だったことから、縄文人の食生活を支えるものでした。以前は縄文時代の生活は狩猟・漁労中心のイメージで考えられていましたが、近年の研究により、実は植物採集に大きく依存する生活をしていただと考えられるようになりました。

さて、発芽したアラカシですが、その後鉢植えした状態で育て続けられ、誰でも見るようにと、昭和50年に現在の場所に本植えされました。現在では高さ10mほどの立派な大樹に成長し、毎年たくさんのドングリを実らせています。もしもこの実が縄文時代に発芽していたら、今と同じように多くのドングリを実らせ、縄文人の大切な食糧となっていたことでしょう。

博物館に訪ねられた折には、この「縄文アラカシ」の樹の下で、縄文人のドングリ拾いの風景を思い浮かべてみるのも楽しいですよ。

※アラカシ(粗榧)…ブナ科の常緑高木

一口メモ

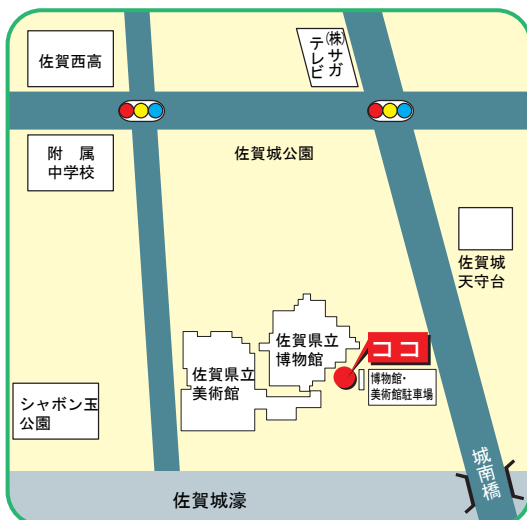
この「縄文アラカシ」に実ったドングリから育った苗木が「縄文アラカシII世」と名付けられ、親木の近くで大事に育てられています。



▲発芽したアラカシの実



▲よみがえった縄文アラカシ



佐賀市 36 歴史探訪

く ぼ いずみしょう がっ こう し せき ぼ おお いし 久保泉小学校の支石墓大石

久保泉小学校の校庭隅に、大きな石の記念碑があります。これが弥生時代の支石墓の墓石であったことを、皆さんはご存じでしょうか。

もともとこの石は、金泉中学校南側の田んぼに顔を出していたという大石です。昔から「正現^{しょうげん}さん」(正現稲荷神社)が山から投げ下ろした石といわれ、動かすと雷が鳴るので動かすことができないと伝えられていましたが、40年ほど前に記念碑に転用されて現在に至っています。

また、この大石を動かした時、その下に大型の甕棺^{かめかん}が埋まっていたといいます。このことから、この大石は支石墓であったと考えられ、大型の甕棺があったとするならば、年代は弥生時代前半(紀元前200年頃)と考えていいでしょう。

支石墓は、弥生時代初めから前半にかけて造られたお墓の一種です。地面に墓穴を掘って埋め戻し、その周りに数個の石を置いて、その上に大きな平たい石を据えて墓石とします。数個の石で地面から離して墓石を支えることから「支石墓」と呼ばれます。墓穴の中には甕棺が収められていることもあります。この支石墓は朝鮮半島南部から伝来し、佐賀県・福岡県を主とする北部九州地方に分布しています。久保泉丸山遺跡では、100基近くの支石墓がまとまって発見され、話題を集めました。

昔は田んぼから突き出た支石墓と考えられる大石が金立・久保泉地区では数多くあったようですが、今では民家の庭先などにいくつか残っているだけです。この小学校の片隅にある大石はそうした歴史を教えてください。



▲金泉中学校の南側



▲久保泉小学校の記念碑



▲久保泉丸山遺跡の支石墓(移築後)

一口メモ

久保泉丸山遺跡で発見された支石墓の一部は、古墳とともに金立公園の一角に移築・復元され、公開されています。支石墓がどのようなものか分かりますのでこちらにもおいでになるといいと思います。



よう たい いん こう でん じ ぼ しょ
陽泰院と高伝寺墓所

佐賀藩藩祖である鍋島直茂の名は、戦国武将として、
また「日峯」さんとして皆さんよくご存じのことと思いますが、その直茂を陰で支えた直茂夫人についてはご
存じでしょうか。今回は、直茂の正室である陽泰院ようたいいんにつ
いてご紹介します。

彼女は、龍造寺隆信の家臣で佐賀市南部を拠点とした石井氏の一門、石井常延いしいのぶの娘として生まれました。幼名を彦鶴姫ひこつるひめと言い、直茂に嫁いでは「藤の方」とも呼ばれています。出家してから「陽泰院」と号しました。

直茂と陽泰院との出会いは、直茂が龍造寺隆信とともに有馬氏との戦いに出陣の折、昼食をとるため立ち寄った石井氏の屋敷で、前夫を神代氏との戦いで亡くし実家に戻っていた陽泰院の働きぶりを見て見初めたのがきっかけといわれています。その時のことを、『葉隠』（聞書第三）には「直茂公御覧なされ、あの様に働きたる女房持ち度しと思召され、その後、お通いなされ候」と書かれています。

この頃、直茂は32歳で、陽泰院は29歳でした。

その後、直茂が没する元和4年(1618年)まで約50年間の夫婦生活をおくり、直茂との間に佐賀藩初代藩主である鍋島勝茂をはじめ6人の子をもうけ、寛永6年(1629年)に89歳で没しています。陽泰院は、温厚でやさしい人柄であったようで、直茂とともに家臣の命乞いを行ったり、寒い夜に四人に粥を振舞ったなどというエピソードも残っているようです。

陽泰院のお墓は、鍋島家の菩提寺である高伝寺にあり、直茂の墓石に寄り添うように建っています。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りになり、直茂夫妻やその人柄に思いをはせてみてはいかがでしょうか。



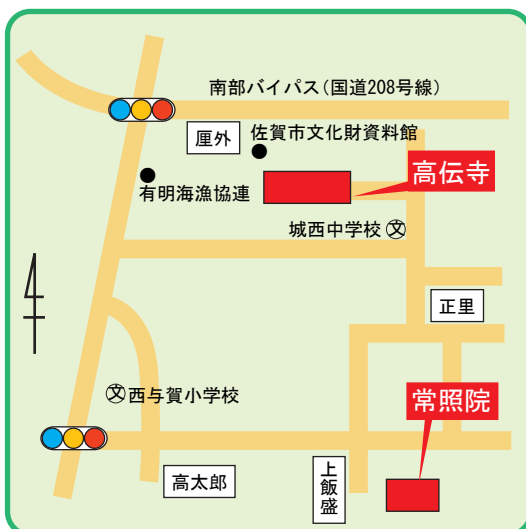
▲高伝寺



▲鍋島直茂と陽泰院の墓



▲常照院



一口メモ

一口メモ 直茂と陽泰院の出会いの舞台となつた石井氏の屋敷が佐賀市南部のどこにあったのか定かではありませんが、陽泰院の父である石井常延じょうえんの菩提寺が本庄町大字鹿子の常照院じょうしょういんであることなどを考えると、このあたりにあったのかもしれない。

佐賀市 38 歴史探訪

とく ぜん いん やま ぶし 徳善院と山伏

頭に兜巾とんきん、首に大数珠おおじゆず、金剛杖こんごうじょうを片手にホラ貝を吹き鳴らす。山伏やまぶしといえばこのようなイメージを思い浮かべるでしょう。現在では間近に接する機会もほとんどありませんが、山伏たちの活動を修験しゆげんといい、江戸時代には仏教や神道と並ぶ庶民の重要な信仰の一つでした。

今回紹介する徳善院とくぜんいんは、英彦山ひこさん（福岡県添田町）の山伏たちが、佐賀での活動拠点としたところです。

徳善院は、本庄江川の西岸、嘉瀬町中原にあります。鍋島直茂の祖父にあたる鍋島清久は、英彦山権現ごんげん ぶんの分霊れいをこの徳善院に移し、鍋島家の繁栄を願いました。そして、直茂が藩祖となると、徳善院は英彦山権現と鍋島家の仲立ちとなって大いに栄え、藩主の代わりに毎年英彦山権現へお参りしたり、病気回復の祈願などを行いました。藩の厚い保護により立派な社殿しゃでんが整備され、門前には山伏たちのために数多くの宿坊しゆくぼうが並んでいたそうです。

江戸時代を通して栄えた徳善院ですが、明治に入ってからには藩の保護も受けられなくなり、政府により山伏たちの活動も禁止されたことから、徐々にさびれていきました。

現在では社殿も残っていませんし、門前に並んだ宿坊の跡も水田となっています。ただ、初代藩主勝茂の四男、鍋島直弘が寄進した石造りの鳥居は参道に残っていて、その下に立つとホラ貝の音が聞こえるような気がします。



▲現在の徳善院



▲鍋島直弘が寄進した石造りの鳥居



▲英彦山銅鳥居

一口メモ

今の英彦山神宮の表参道には高さ6.9メートルもの巨大な青銅製の「銅鳥居」が立っています。これは鍋島勝茂が英彦山権現に寄進したもので、建立の際には徳善院が英彦山への使者に立っています。また、この鳥居の铸造は、佐賀藩の御用鋳物師として有名な谷口家が主として行いました。英彦山に登る機会がありましたら、ぜひご覧ください。



佐賀市 39 歴史探訪

かた た え なな こう じ 片田江七小路

「片田江」は佐賀の人にとってなじみ深い地名ですが、「片田江七小路」についてはご存じでしょうか。

現在の片田江交差点から南北に通る道路(現在の主要地方道佐賀川副線)の一部は、道幅は変わっていますが、江戸時代からある通りで、当時は今の松原三丁目交差点で行き止まりになっていました。これが「片田江(竪)小路」と呼ばれるもので、この通りからは裏十間川に沿った裏十間端小路へつながる、東西方向の小路が枝分かれしていました。

それぞれの小路には名が付けられ、「片田江(竪)小路」の北端にある「馬責馬場」、そこから南へ順に「通小路」、「花房小路」、「中ノ橋小路」、「枳小路」、「会所小路」と、今でも呼ばれています。これがいわゆる「片田江七小路」と呼ばれるものです。(※通りの読み方はいろいろあるようです)

江戸時代、この「片田江七小路」一帯は佐賀城下の武家屋敷地として、中級武士が多く居住していました。今でも、大隈重信旧宅や武家屋敷の門など、往時の様子をしのぶものを見ることができます。

ほとんどの小路は今でも当時の姿を伝えていますが、唯一「椎小路」だけは、昭和6年度から11年度にかけて建設された「東西貫通道路」(現在の国道207号線・264号線)の路線内に取り込まれたため、現在では本来の姿を見ることができません。

近年、佐賀市内に数多くあった小路は次第にその数を減らし、小路の名称も時代の変遷とともに忘れられつつあります。

たまには、車を降りてゆっくりこの小路を散策してみたいはいかがですか。懐かしさとともにきっと新しい発見があるはずです。

最後に、「片田江七小路」の名前と順番を覚えるために、この歌をご紹介します。

馬、通り、椎に花房、中ノ橋
枳に会所は片田江のうち

写真(通りの西側から)

- 【1】馬責馬場 【5】中ノ橋小路
- 【2】通小路 【6】枳小路
- 【3】椎小路 【7】会所小路
- 【4】花房小路

【1】馬責馬場



【2】通小路



【3】椎小路



【4】花房小路



【5】中ノ橋小路



【6】枳小路



【7】会所小路



佐賀市 40 歴史探訪

そう かん とう じん まち 宗歓と唐人町

今回は、佐賀駅南にある唐人町とその地に関連が深いとされる宗歓について紹介します。

ごようとうじんまちあらものからものやしよくごゆいしよかき
『御用唐人町荒物唐物屋職御由緒書』によると、『宗歓は高麗国吉州の生まれで、天正15年(1587)に突然の暴風雨に遭い筑前国黒崎に漂着した後、大宰府参詣に立ち寄った龍造寺家晴と成富兵庫茂安と出会い、連れられて佐賀を訪れた。彼らの仲介で鍋島直茂と面会した宗歓は、姓を名乗ることを許され、直茂に召し抱えられることになった。文禄・慶長の役(1592～1598)の後、慶長4年(1599)に、宗歓は海外貿易の御用商人の資格を与えられ、十間堀川北岸の地に居を構えることを許された。直茂はこの地を、宗歓の生地になんで「唐人町」と名付けた。』ということが記されています。

その頃から、この地には商人をはじめさまざまな人が集まるようになり、町は次第に発展していったようです。別の記録をみると「唐人町」は当初、神野村の一部であったようですが、正保年間(

1644～1647)には佐賀城下へ編入されており、承応3年(1654)の佐賀城下絵図には「唐人町」以外にも「(唐人)寺町」、「唐人新町」の地名がみえ、寛政年間ころ(1789～1800)には佐賀城下三十三町の中にその三つの名前が入るまでになっていることなどからも、その発展ぶりがうかがえます。

今では町並みも変わり、江戸時代の趣はずいぶんと失われている現在の唐人町ですが、縁が深いとされる宗歓やその一族をしのぶものとして、唐人碑や彼らの墓が今でも大切にされています。

一口メモ

■唐人碑は、唐人町会館前の唐人神社(唐人一丁目)祠内に、宗歓一族の墓は浄土宗鏡円寺(唐人一丁目)

にあります。

■『御用唐人町荒物唐物屋職御由緒書』は宗歓の子孫という鍋島藩御用荒物屋の川崎勘四郎が天保13年(1842)に佐賀藩に差し出した文書です。

■宗歓が生まれたとされる吉州は、現在の朝鮮民主主義人民共和国咸鏡北道吉州郡にあたると思われます。



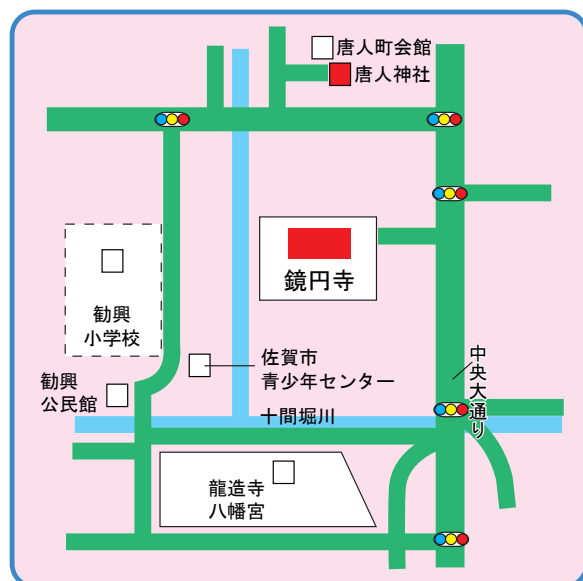
▲鏡円寺



▲宗歓の墓



▲唐人神社



佐賀市 41 歴史探訪

鍋島直茂と宗智寺

佐賀藩祖鍋島直茂は、「日峯」という名称で親しまれています。今回は、この直茂の臨終の様子について『直茂公譜』や『元茂公年譜』などの史料を元にお話ししましょう。

晩年、多布施の館に隠居していた直茂の耳に小さな疔がで、どうにか取り除いた後もその跡から汁が流れ出て止まらず、治療に手を尽くしたもののよくなりませんでした。このため、直茂は、「天下に名を知られている自分が、皮膚が爛れて養生が叶わなかったと云われることを思うと、早く死を迎えたい」と、食事も薬もとろうとしなくなりました。そして元和4年(1618年)延命を望む周囲の願いも届かず、ついに亡くなりました。数え年で81歳の時でした。

直茂は死に臨み、この多布施の館に逆修(生前あらかじめ死後の仏事を修めること)の墓碑を立てるとともに、この地を寺地に取り立て自らを埋葬するように遺言しています。これは、「もし乱世になって、他国より佐賀へ敵が押し寄せてくる時、北への守りがとくに大切である。自分がここに埋まっていれば家中の者はこの地を敵の馬の蹄に懸けまいと奮戦し、城下に敵を入れることはなく持ち堪えられる」との賢慮があつてのことだと伝えられています。

なお、この多布施の館には、法名である「日峯宗智大居士」にちなんで「日峯山宗智寺」という寺が建立され、現在に至っています。

一口メモ

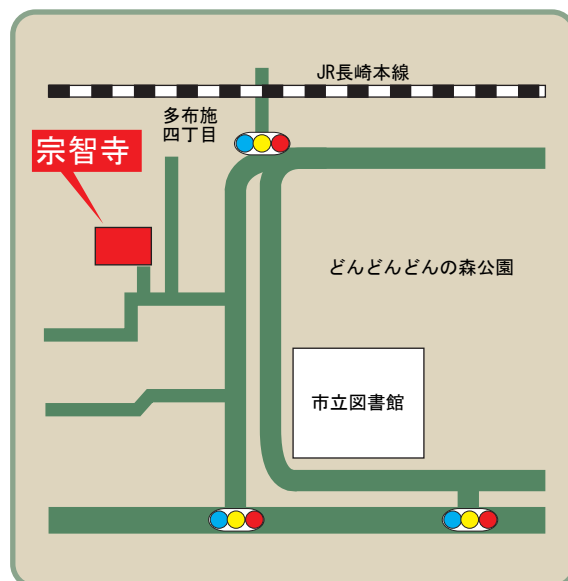
・直茂の墓碑には、「鍋嶋加賀守豊臣朝臣直茂」との銘が刻まれています。この墓碑は明治になって宗智寺(多布施四丁目)から鍋島家の菩提寺である高伝寺(本庄町大字本庄)に移され、陽泰院(直茂夫人)の墓石とならんで立てられています。



▲宗智寺



▲高伝寺にある鍋島直茂の墓碑
(右隣の自然石は直茂夫人陽泰院の墓石)



佐賀市 42 歴史探訪

せい どう たくみ わざ 「青銅の匠の技」

科学の進歩に伴って現代の技術力は飛躍的な発展を遂げたといわれますが、それに勝るとも劣らない高度な技術は過去の時代にもたくさんあります。今回はその一つの例として弥生時代の青銅鏡「多鈕細文鏡」(注1)を紹介します。

この鏡は、朝鮮半島から伝来したと考えられる凹面鏡で、鍋島町増田遺跡の甕棺墓から出土しました。大きさは直径約9センチ、厚さは薄いところで約2ミリと、小型で薄く作られています。縁には幅約1センチの厚みを持った断面カマボコ形の高まりが巡り、鏡の中央付近には紐通しの穴のついた「鈕」と呼ばれる突起が3個(1つは失われていましたが)付けられていました。

この鏡の最大の特徴は、精密で極めて細い線による幾何学的な文様がつけられていることです。驚くことに、この文様は後から削り出されたのではなく、鑄型によって鑄出されているのです。これだけの精密な線をこれほど見事に鑄出すことは、現代の熟練工にとってもそう容易なことではありません。

弥生時代には、多くの青銅器とともにそれを作る技術が朝鮮半島から伝来し、日本でもさまざまな種類の青銅器が作られるようになり(注2)、独自の青銅器文化が発展しました。

この鏡は、現代でもなかなかまねのできない、当時の“匠の技”を今に伝えてしています。しかも、その高度な技は、現代においてもまだ完全には解明されていないのです。

(注1) 鈕が複数個ある「多鈕」で、文様の線が極細な「細文」の「鏡」なので、「多鈕細文鏡」と呼ばれています。

(注2) 不思議なことに多鈕細文鏡が日本で作られた形跡は確認されておらず、なぜなのかはよく分かっていません。

一口メモ

■多鈕細文鏡は、現在、全国での出土例が非常に少ない貴重なもので、今回紹介した鏡は、佐賀県重要文化財に指定され、佐賀市文化財資料館で保管されています。



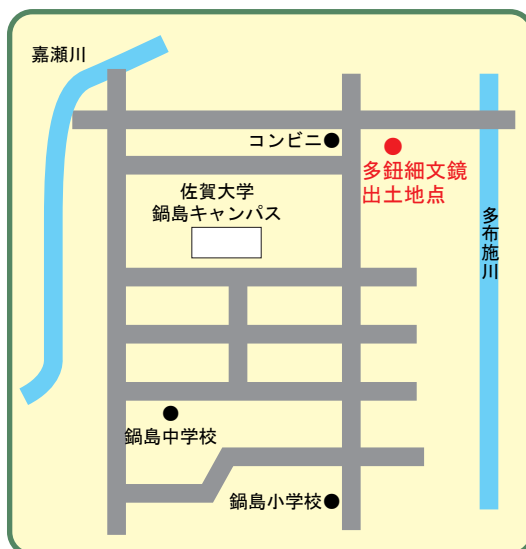
▲出土した多鈕細文鏡



▲多鈕細文鏡を出土した甕棺墓



▲精密な細文(拡大)



佐賀市 43 歴史探訪

ひ え じん じゃ ひら 日枝神社の「おかゆ開き」

皆さんは粥占いというものをご存じでしょうか。
古くは「粥占神事^{かゆうらのしんじ}」といわれた、一年間の天候や作物の豊凶を占う「年占^{としうら}」の一種です。

今回紹介する日枝神社の「おかゆ開き」は、この粥占いを今に伝えるもので、次のような方法で行われています。

お供えた米で、1月14日夜に粥を炊き、写真にある二つの鉢に盛ります。粥の上には稲わらを置いたり、旗を立てたりして、地域や地区を表します。これを1月15日早朝、社殿に奉納し、2月15日に開きます。この間、粥に生えたカビの色などで吉凶を占い、各地区での暮らしの参考とします。

吉兆を示すのは、青色・黄色・白色のカビとされています。カビ全体に乾燥がひどい場合は干ばつ、水玉に見えるカビが多いときは大水の兆しとされます。黒カビは水の災い、赤カビは火の災いを表し、注意が必要といわれています。これに加えて、それぞれカビの色の濃淡によっても微妙に意味合いが異なるそうです。

他地域では、炊き上がった時に棒の割目や竹の管に入った粥の分量で占う方法が多いようで、粥に生えたカビで占う方法は珍しいと言えるかも知れません。



▲奉納された「おかゆ」



▲「おかゆ開き」の様子



▲「おかゆ開き」の鉢

一口メモ 粥占いは、小正月^{こしょうがつ}(1月15日)の行事として、以前は各地で行われていましたが、今でも伝承されている所は少なくなっているようです。2月15日、おかゆ開きの鉢は、日枝神社の社殿に飾られます。皆さんもお訪ねになってみてはいかがでしょうか。



佐賀市 44 歴史探訪

くさ ば はい せん か の う ま る こ ふ ん 草場佩川と花納丸古墳

天保11(1840)年1月19日に、久保泉町川久保に住む村人が、家をつくるために土手の石を外したところ、古墳の石室を発見しました。この中には、青銅製鏡1面、青銅製鈴(三環鈴)1個、碧玉製管玉12個などが納められていたので、これを掘り出したといいます。

私たちが、江戸時代の終わりごろに起きたこのことを詳しく知ることができるのは一体どうしてだと思いますか。それは、この顛末(てんまつ)を記した2種類の文書が、古墳の出土遺物とともに、今でも残されているからなのです。

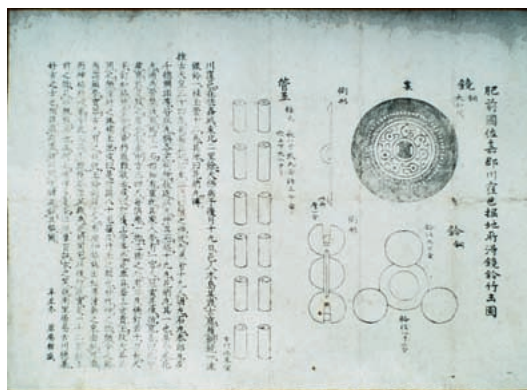
この2つの文書のうちの1つは、肥前の儒学者として有名な草場佩川(1787~1867)が書いた記録・考証に、歌人や画家として有名な古川松根(1813~1871)が描いた出土遺物の模写図を載せたもので、手書きではなく、木版によって印刷されています。載せられた図は遺物の特徴を的確にとらえたもので、その材質や寸法なども細かく記載されています。もう1つは墨で手書きされたもので、木版刷り記録の草稿と考えられるものです。

これらの記録に書かれた内容からは、博学多才と評され佐賀藩校弘道館の教授ともなった草場佩川が、今日でいう「考古学」の分野に対しても非常に大きな関心を寄せていたことがよく分かります。書かれている内容の中には、現在の研究成果と比較すれば、幾分違った解釈の部分もありますが、古墳に関する藩政期の記録としては県内唯一の貴重な資料であることには変わりありません。この文書をもって、彼を佐賀藩における「考古学」の先駆者と言っても過言ではないでしょう。

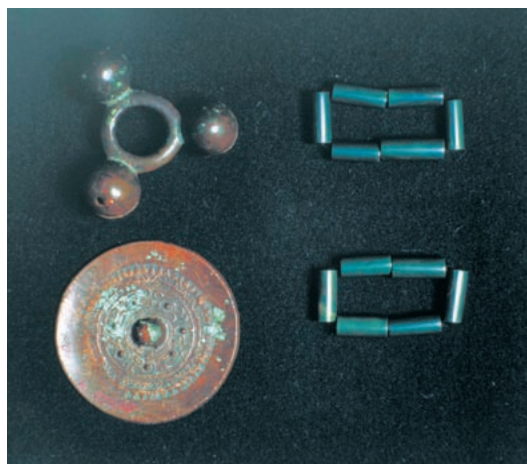
一口メモ

■古墳は現在「花納丸古墳」と呼ばれており、佐賀県史跡である関行丸古墳の西側にあったと考えられますが、古墳そのものはすでに消滅していて、どのような形状や構造だったのかは明らかではありません。

■ご紹介した記録と出土遺物は、佐賀県重要文化財に指定され、佐賀県立博物館に常設展示されています。



▲花納丸古墳の記録(木版印刷物)



▲花納丸古墳出土遺物



佐賀市 45 歴史探訪

「大銃製造方」と本島藤太夫

“幕末佐賀藩が行った鉄製大砲の铸造”、日本で最初にこの偉業を実現したのが「大銃製造方」です。嘉永3年(1850)7月に起工された築地の反射炉で始まった鉄製大砲の铸造は、幾多の困難を乗り越え、翌年10月に、ようやく成功しています。この「大銃製造方」のメンバーには、蘭学者や西洋技術者のほか、鋳物師や刀鍛冶など古くから日本に伝わる技術の職人も含まれていました。

今回、紹介する本島藤太夫は、こうした多彩なメンバーからなるプロジェクトチームのリーダーを務めた人物です。

本島藤太夫は、文化7年(1810)生まれで、長く10代藩主鍋島直正(閑叟)の側近を勤め、「大銃製造方」の前身である「火術方」の創設以来、一貫して佐賀藩の軍備面を担当し、直正の軍事政策の実現に奔走しました。

その後、本島藤太夫は、「御台場増築方」「公儀石火矢鑄立方」「蒸気船製造役局」「海軍取調方」などの役職を歴任し、直正の隠居とともに「大殿様御側御目付」に就任しています。

明治3年(1870)には隠居して松蔭と号した後、『松之落葉』を執筆し、明治22年(1889)に亡くなっています。この『松之落葉』は、天保14年(1843)以降の佐賀藩軍備の記録をまとめたもので、勝海舟の『海軍歴史』『陸軍歴史』などにも参照・引用され、現在でも貴重な歴史資料となっています。

一口メモ

本島藤太夫の墓碑は、佐賀市伊勢町の妙覚寺の一角に、ひっそりと残っています。自然石の墓碑で、碑面には「本島松蔭之墓」とだけ刻まれています。



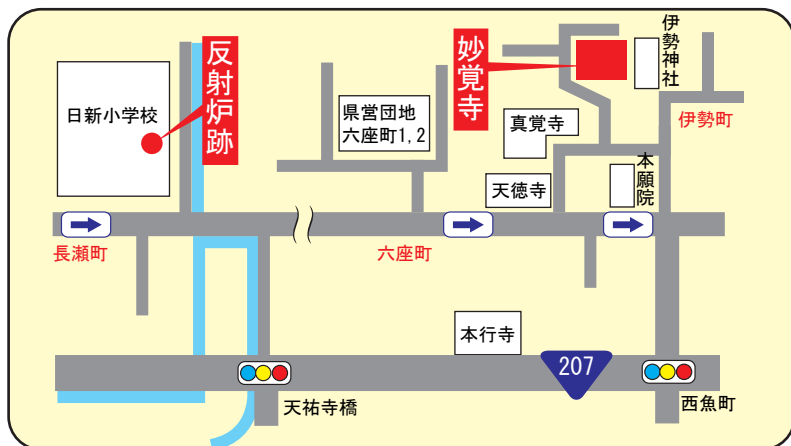
◀ 築地反射炉跡の記念碑



◀ 復元鉄製24ポンドカノン



◀ 本島藤太夫の墓碑



佐賀市 46 歴史探訪

く ぼ い ず み ま ち ま が い ぶ つ 久保泉町の磨崖仏

磨崖仏といえば、大分県臼杵市の国宝「臼杵磨崖仏」や佐賀県唐津市相知町の県指定史跡「^{うどの}鶴殿石仏群」などが有名ですが、この磨崖仏が佐賀市にもあることをご存じでしょうか。今回は久保泉町にある磨崖仏「^{にょいりん}如意輪^{かんのんちやうぞう}観音彫像」をご紹介します。

磨崖仏は、山麓の岩肌に彫られた仏教に関係のある彫像の総称で、九州で盛んに造られるようになったのは平安時代以降のことです。また、その中には修験道や民間信仰から生まれたものも多くあり、このため谷奥などの人目につきにくい場所に造られ、彫られた仏像の組み合わせにも寺院の本尊などとは異なった特殊なものも見受けられます。

久保泉町の如意輪観音彫像も同様に、川久保字上分一の山深い谷筋にある大きな岩に彫られています。半肉彫の如意輪観音の^{はんかざどう}半伽座像は、首を右下に傾け、右足を曲げ、左足は立膝にして、滝の上に座するような姿を表現しています。この彫像の作者や正確な造立年代は分かりませんが、一般的に広く各地で如意輪観音の造像が見られるのは江戸時代中期以降であるといわれていることから、この彫像も江戸時代中期以降に造られたものではないかと推測されます。

如意輪観音はすべての生き物の苦しみを取り去り、願いを叶えてくれる仏とされています。当時の人々は、この仏にどのような願いを込めていたのでしょうか。



▲如意輪観音彫像全景



▲如意輪観音彫像

一口メモ

如意輪観音彫像がある山の西側山麓に位置する大小野集落内には、佐賀市天然記念物である「^{しやくなげ}大小野の石楠花」があります。毎年5月の開花時期には淡紅色の花を一面に咲かせます。如意輪観音彫像を見学される機会があれば、ここにも一度訪ねてみられてはいかがでしょうか。



佐賀市 47 歴史探訪

く ぼ い ず み ま る や ま い せ き

久保泉丸山遺跡のタイムカプセル

金立公園の一角に、久保泉丸山遺跡が移築復元されているのをご存じの方は多いと思います。この遺跡は、長崎自動車道建設に伴い昭和51・52年に発掘調査が行われました。縄文時代晩期～弥生時代前期の支石墓群をはじめ、紀元5～6世紀の古墳群が小さな台地上にまとまって存在している複合遺跡で、学術上きわめて価値の高い内容をもつものでした。

古墳群中の3号墳は径13.8mの円墳で、内部に1基の舟形石棺が埋置されていました。舟形石棺の名は身の形が舟に似ていることから付けられたもので、舟葬と結びつけて考える説があります。全長232cm、蓋は屋根の形をしていて、両端部に縄を掛けるための突起が造り出され、石材には佐賀平野にはない阿蘇溶結凝灰岩が使われていました。

現地に設置してある石棺は複製品で、熊本県玉名郡南関町の石切場から採取した阿蘇溶結凝灰岩が使用されています。大型のカッターなどで切り出した後、最終的に石工の手によって削り出されました。工具は当時の製作技術に近づけるため、大正・昭和初期に使用されていたノミや手斧などが用いられました。そうして復元された石棺の中には、県内の人々や事業関係者から募集した記念品が納められ、タイムカプセルとして利用されています。

こうした舟形石棺は佐賀平野では数が少なく、ほかに市内の熊本山古墳が知られている程度です。丸山遺跡と同形式の舟形石棺は、熊本県菊池川下流域と福岡県大牟田市周辺に集中して分布しており、当時の佐賀平野と筑後南部・肥後北部との関わりを示す資料として大変貴重なものです。

※舟葬…古くから海洋民族には、舟に遺骸を納めて葬る風習があり、古墳時代の日本にも舟形の棺を用いていることから、舟葬儀礼があったという説があります。

※阿蘇溶結凝灰岩…鼠色の加工しやすい岩石で、阿蘇山を中心に熊本県、大分県、福岡県南部などに広く分布しています。

一口メモ

舟形石棺の実物は、佐賀県立博物館(佐賀市城内一丁目)に展示してあります。ぜひ一度ご覧ください。



▲移築復元された丸山遺跡



▲3号墳舟形石棺



佐賀市 48 歴史探訪

ほん まる ご てん ご ざ の ま かん にん ど ころ

本丸御殿と「御座間・堪忍所」

藩主の居間にあたる「御座間」と警固詰所にあたる「堪忍所」は、天保年間(約160年前)に再建された本丸御殿の建物の一つでした。ほかの建物が解体されてしだいに姿を消していく中、最後まで現地に残っていました。

昭和32年までは現地の赤松小学校内で「永久保存建物」として「御居間^{おいのま}」と呼ばれて親しまれましたが、その後は校舎新設のため南水ヶ江の大木公園に解体・移築し、南水会館として平成13年まで活用されていました。

佐賀城本丸歴史館建設に際して、「御座間・堪忍所」は、佐賀城関連建物としては「鯨の門」を除いて唯一の現存建物である重要性から、現地に移築・復元されました。いろいろな資料と綿密な調査により可能な限り、天保年間の姿に近く復元されています。

鍋島閑叟公の「御座間」、ぜひご覧になってください。

一口メモ

■本丸御殿のほかの建物に比べると、「御座間・堪忍所」の瓦や部材の一部は古色を帯びていますが、これが年月を経た本物の証ですので、どうか見比べてみてください。



▲佐賀城本丸歴史館玄関



▲佐賀城本丸歴史館全景



▲御座間

(写真は佐賀城本丸歴史館提供)

佐賀市 49 歴史探訪

かせまちおぎの ろくじぞう 嘉瀬町荻野の六地藏

じぞうぼさつ かんぜおんぼさつ
地蔵菩薩は観世音菩薩とともに、最も庶民に親しまれ信仰されている仏様ではないでしょうか。

今回はこのような信仰の歴史遺産、六地藏を紹介します。

地蔵菩薩は天上・人間・修羅・餓鬼・畜生・地獄の六道を巡ってすべての生き物を救済してくれる仏といわれており、末法思想が広まる平安時代の終わりごろから広く信仰されるようになっていきます。

六地藏はこのような地蔵菩薩信仰から生み出された石造物の一つです。室町時代後期を中心とした時期に盛んに造られていて、柱状の竿石の上に中台をのせ、それに6体の地蔵菩薩像を半肉彫りしたがん龍部(仏像が掘り込まれた部分)を安置し、さらにその上に宝珠のついた笠石をのせるという形式のものが最も一般的な形のようにです。

佐賀市内には数多くの六地藏が残されていますが、嘉瀬町荻野にある六地藏は笠石に「文明16年(1484年)」という造立銘があり、現在県内で確認されているものの中では最も古い造立銘をもつものです。

500年以上にわたって人々の思いとともに大切に守られてきた六地藏、一度訪ねてみてはいかがでしょうか。



▲六地藏



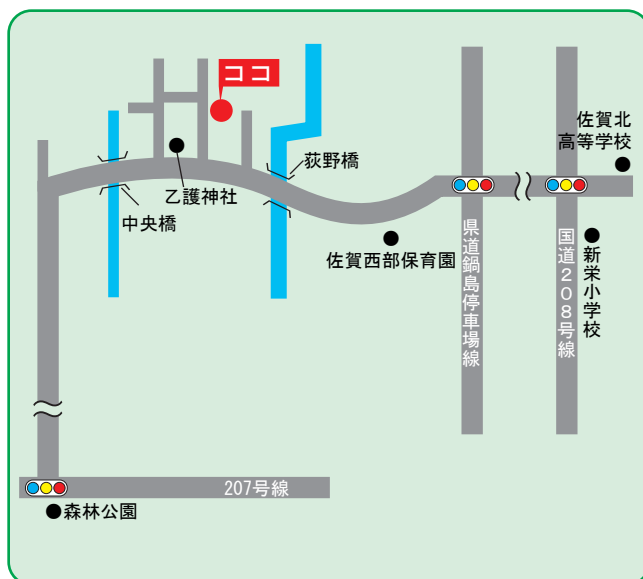
▲六地藏龍部

一口メモ

この六地藏は、昭和49年2月11日に佐賀市重要文化財に指定されています。

《末法思想》 釈迦しやかの死後1000年間を「正法」、その後の1000年を「像法」、像法の後の10000年間を「末法」という3時期に区分し、末法の時期に入ると仏教が衰え世の中が乱れるという思想です。

日本では永承7年(1052年)に末法の時期に入るとされ、当時の天災、戦乱、飢饉などによる乱れた社会状況が、人々にこのことが現実になったのではないかと強く思わせることとなり、急速に末法思想が広まることとなりました。



佐賀市 50 歴史探訪

む た より い せき しゅつど こ だい いん 牟田寄遺跡出土の古代印

「はんこ」は現在の日常生活に欠かすことができないものですが、佐賀市兵庫町にある牟田寄遺跡からは平安時代前半ごろ（9世紀～10世紀）に使われていた古代の銅印が出土しました。

日本で発見された最も古いものとしては、福岡県の志賀島で発見された「漢委奴国王」の金印が知られていますが、中国の影響を受け、印の種類や寸法などを規定し、文書などを確実化し有効化させる手段のものとして制度が確立したのは奈良時代になってからのことです。

牟田寄遺跡から出土した銅印は、制度化されて間もないころに使われていたもので、高さ4.3cm、印面3.4cm角、重さ105gの青銅製です。その特徴は、手で摘む部分（ちゅうぶ）が花の萼（つぼみ）のような形で、紐などを通すためと考えられる穴があげられています。また、印面部分の輪郭は二重になっていて、全国的にみても珍しいものです。文字の判読や意味については確定できていませんが、印面が正字としたら、へん（てん）とつくりが逆転した「朝」、印影が正字としたら「勝」の篆書体の異体字の可能性があり、人名の一字を表現しているとも考えられています。

このような形の特徴や印面の寸法などから、この銅印は個人が所有していた「私印」と考えられます。古代印は役所跡や寺院跡などから出土することが多いため、所有者は公的施設に関わりをもっていた人物であったのかもしれません。

一口メモ

佐賀県内での古代印は牟田寄遺跡から出土したものが初例です。九州内をみても希少な出土例であるため、平成13年2月に佐賀市重要文化財に指定されました。現在、佐賀市文化財資料館で見ることができます。



▲古代銅印



▲印面



▲印影



佐賀市 51 歴史探訪

ほり え じん じゃ ふりゅう げん ば いち りゅう 堀江神社の浮立玄蕃一流

堀江神社は、熊襲征伐のため肥前にきた日本武尊の威徳をしのいで土地の人が祠を建て堀江大明神と称えたことが起源といわれています。

弘安4(1281)年の元寇(弘安の役)の時、後宇多天皇が一州一宮社の神を勧請して祈願した際に木彫りの神像が奉納されたと伝えられる古い神社です。歴代の龍造寺氏、鍋島氏から厚く崇敬されていました。

堀江神社の浮立は、「玄蕃一流」と呼ばれ、毎年11月3日の例祭(供日)に氏子である草場、東神野、西神野の3地区によって奉納する習わしになっています。

「玄蕃一流」は、頭に大きな冠状の輪をつける天竺舞浮立で、天竺舞、大太鼓打ち、小太鼓(もらし)、鉦、笛、調子方、謡方、宰領、世話人、供人が参加します。天竺舞は日月にかたどった雲龍を画いた直径1メートルくらいの紙張の前立を額に当てた、農民の姿ながら武装を思わせる装束で、撥を両手に大太鼓を打ちながら謡に合わせて舞い踊ります。

この天竺舞は、弘治2(1556)年5月に未曾有の旱魃を憂えた大宮司の山本玄蕃が、堀江大明神に雨乞い祈願のため舞ったことで、自然に「玄蕃一流」というようになったと伝えられています。

天竺舞浮立は、佐賀市とその周辺でも行われていてその種類も多いのですが、堀江神社につながるものだけが「玄蕃一流」と呼ばれています。

この「浮立玄蕃一流」は伝統行事としての重要性から、昭和43年に佐賀市重要無形民俗文化財として指定されました。

一口メモ

後宇多天皇が戦勝祈願のために奉納されたと伝えられる木彫りの神像67体は、今も堀江神社に納められ、昭和43年に佐賀市重要有形民俗文化財「堀江神社神像群」として指定されています。



▲佐賀市重要無形民俗文化財「浮立玄蕃一流」



▲佐賀市重要有形民俗文化財「堀江神社神像群」



真覚寺「鐘楼」の保存修理

佐賀市 53 歴史探訪

ふ ぼ でら ゆう えき 父母寺の有益さん

佐賀市高木瀬東三丁目に両足山父母寺という臨済宗東福寺派の古刹があります。そのお寺の墓地の入口に、地元「有益さん」と呼ばれている大きな石像が祭られていることを皆さんご存じでしょうか。

今回は、この「有益さん」と呼ばれる石像についてご紹介します。

この石像は安山岩製の僧侶像で、像の高さは1.5mほどあります。全体的にふっくらとした顔立ちや体形に彫られていて、手をお腹の前で組み、袈裟が線彫りで表現されています。また、背面には「預修善根仙叔明鶴今泉有益禅庵主寿位、慶長二十年(1615年)二月吉祥日」という銘が刻まれています。

この像がどのような目的で建立されたのかははっきりしたことは分かっていませんが、地元には「父母寺の住職の像ではないか」「墓守をしていた人物の像ではないか」などいくつかの説があるようです。

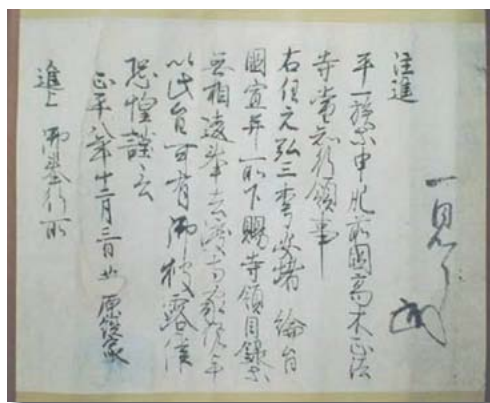
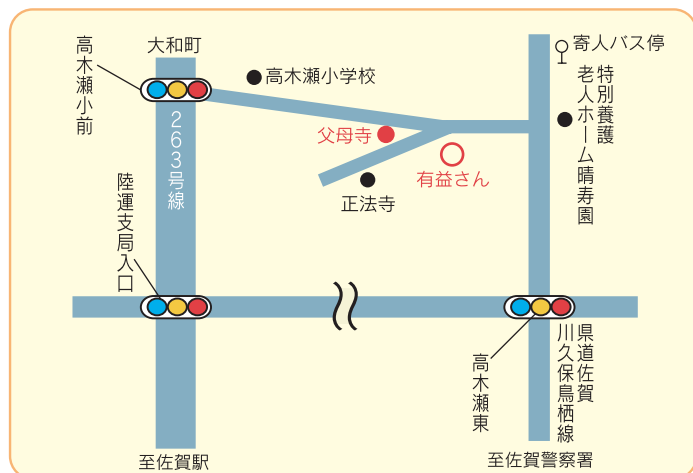
「有益さん、有益さん」と人々に親しまれ、大切に守り継がれてきた石像、一度ご覧になられてはいかがでしょうか。



▲父母寺墓地



▲有益さん



▲佐賀県重要文化財「正法寺文書」



▲佐賀県重要文化財「正法寺所蔵大般若経」

一口メモ

父母寺の南西にも、高木山正法寺という臨済宗東福寺派の古刹があります。このお寺は中世この一帯に勢力を誇った高木氏の菩提寺で、このお寺に伝わった「正法寺文書(※1)」や「大般若経(※2)」は佐賀県重要文化財に指定されています。

(※1)は現在、県立図書館に寄託

(※2)は現在、県立博物館に寄託

佐賀市 54 歴史探訪

すぎ たに よう すけ つい じ はん しゃ ろ 杉谷雍助と築地反射炉

嘉永3(1850)年7月に起工された築地反射炉で始まった鉄製大砲の^{ちゅうぞう}鑄造は、幾多の困難を乗り越えながら多大な成功を収めました。このプロジェクトチームには、蘭学者のほか、^{い も じ}鑄物師や^{かたなかじ}刀鍛冶など古くから日本に伝わる技術の職人も含まれていました。

今回、紹介する杉谷雍助は、こうした多彩なメンバーからなるチームでリーダーの本島^{もとしま}藤太夫^{とうだゆう}に次いで、技術的なチーフにあたった人物です。

杉谷^{ぶんせい}雍助は、文政3年(1820)生まれで、藩校弘道館で学んだ後、長崎で蘭学を学び、さらに江戸に遊学して佐賀出身の蘭学者である伊東^{いとう}玄朴^{げんぼく}の象先堂^{しょうせんどう}に入塾しました。その間、杉谷雍助は伊東玄朴らとともに鉄製大砲製造のテキストである『ロイク国立鉄製大砲鑄造所における鑄造法』(鉄砲全書)を翻訳しました。この翻訳によって、帰藩後の嘉永3年6月、杉谷雍助は新たに設置された鉄製鑄砲局に配属され、実際の大砲鑄造を手がけることになりました。

反射炉の中でいったん溶けた鉄が固まったり、思うように鉄が流れなかったり、第1回目の鑄造から14回目ようやく満足できるものが仕上がったようです。「此砲未タ西洋ニ及バザルアリト雖其相違ル事豈ニ遠カラシヤ」(この大砲はまだ西洋で造られたものには及ばないが、その差は決して遠いものではない)杉谷雍助は、こう書き記しています。

この後、佐賀藩での鉄製砲の鑄造は軌道に乗り、幕末の日本では最も成功した反射炉事業となりました。

安政4(1857)年には、幕府の要請により杉谷^{あんせい}雍助^{いす}は建設中の伊豆^{いす}山^{にらやま}反射炉の技術指導に派遣されています。

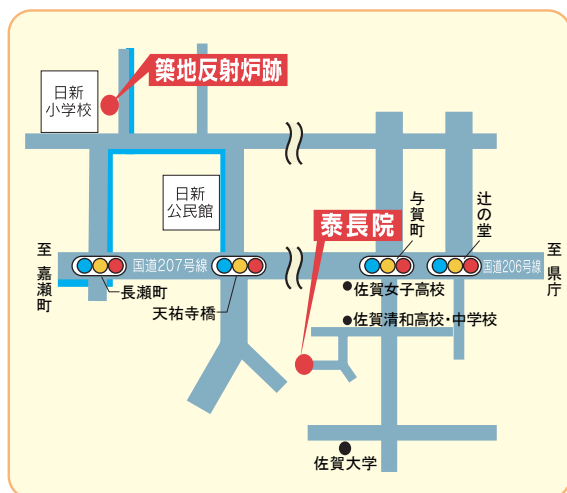
その後、杉谷雍助は、佐賀藩の造砲局主事に就任した後、慶応2(1866)年になくなり、墓所は佐賀市精町の泰長院にあります。



▲佐賀史跡「築地反射炉跡」



▲泰長院の杉谷雍助墓所



佐賀市 55 歴史探訪

ほん じょう じん じゃ ろう もん さる 本庄神社楼門の猿

本庄神社は欽明天皇のころ(539年～571年)に創始されたと伝えられる古い神社で、与賀神社や川上神社と同じく与止日女大神を祭神としています。

この神社の楼門の上に置かれた2匹の木彫りの猿を皆さんご存じでしょうか。今回は本庄神社楼門に置かれた木彫りの猿にまつわるおもしろい逸話についてご紹介します。

この木彫りの猿は、藩祖鍋島直茂が本庄神社を改修した際のものと伝えられています。当初は両手を前で合わせるように作られていましたが、その後片方の手を後ろに廻すように作り変えられたそうです。このことについて、地元には次のような逸話が残っています。

それは、「鍋島直茂が本庄神社を改修して以来、付近の田畑が頻繁に荒されるようになった。ある夜村人が畑を荒らす影を見つけたので、正体を確かめようと後を追ったら、その正体がこの木彫りの猿だった。このため、本庄神社の氏子が集まり、直茂公にこのことを相談した上で、木彫りの猿の眼を潰し、後手に縛り上げたように作り変えたら、その後は付近の田畑が荒されたりするようなことはなくなった」というものです。

ことの真偽はともかく、古い神社に伝えられる逸話とともに鍋島直茂の人柄を偲ばせる遺産として、一度ご覧になられてはいかがでしょうか。



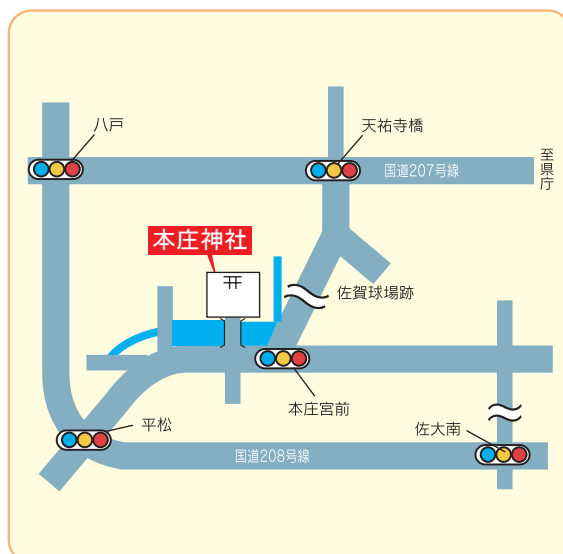
▲本庄神社



▲楼門の木彫りの猿

一口メモ

本庄神社には2基の肥前鳥居があります。そのうちこの鳥居には慶長8年の銘があり、古い造立銘をもつ肥前鳥居として佐賀県重要文化財に指定されています。また、境内の中にある石灯籠も県内にある石灯籠のなかで最も古い造立銘のものとして佐賀市重要文化財に指定されています。



佐賀市 56 歴史探訪

たかぎせまちひらおきおこしじぞう 高木瀬町平尾の木起地蔵

高木瀬町の平尾天満宮境内のお堂に「木起地蔵」と呼ばれている小さな地蔵菩薩が祀られています。この地蔵菩薩は元々別のところに祀られていたものを動座したものと伝えられますが、今回は地元に残されたこの地蔵菩薩にまつわるお話を紹介します。

そのお話とは、次のようなものです。

昔この付近には神木として崇められていた大きなクスノキがありました。このクスノキが文政11年(1828)8月の大風で傾き、傍らに祀られていたお地蔵さんのお堂に倒れかかろうとしました。このままでは危険だということで、地元の庄屋さんや村人が話し合い、このクスノキを切り倒そうということになりました。するとその夜、このクスノキの辺りから「エイエイ」という人の声が聞こえたので、翌朝になって村人が見に行くと、驚いたことに倒れかかっていたクスノキが元どおり立ち直っていました。このことから、クスノキを起こしたのはお地蔵さんで、夜中に聞こえた声は木を起こすときのかけ声であったろうということになり、それからこのお地蔵さんを「木起地蔵」と呼ぶようになったそうです。その後この話が人々に広まり、数多くの人々が参拝に訪れるようになったそうです。

現在この「木起地蔵」が祀られる平尾天満宮の境内にも樹齢270年と云われる大きなクスノキが生えています。お地蔵さんが起こしたクスノキもこのような巨木だったのかもしれません。

一口メモ

平尾天満宮の創建は、この地一帯を開墾するため移住してきた巨勢町平尾の人々が巨勢町平尾天満宮からの分霊を祀ったのが始まりとする説があります。江戸時代から天満宮の祭事には「平尾の餅相撲」と呼ばれる奉納相撲が行われ、現在も10月のお祭りでは子供相撲が催されています。



▲平尾天満宮



▲木起地蔵



佐賀市 57 歴史探訪

さが じょうにし ごもん どばし あかいし ごがん 佐賀城西の御門土橋の赤石護岸

佐賀城は低平な佐賀平野に築かれた平城で、城の周囲は幅40間(約70m)ほどの広い堀で囲まれています。このような佐賀城への出入口は全部で4カ所あり、その一つに西の御門があります。

西の御門自体は、古写真や詳細な絵図が残っていませんので、詳しくは分かりません。ただ、門までの通路は西堀の兩岸から堀を埋めて土橋を築き、その途中に木橋を架ける構造になっていて、門の内側には土塁を築き城内の遠望ができないような工夫がされていたことが「佐賀城分間御絵図」に描かれています。

平成16年度に実施した埋蔵文化財確認調査で、このような西の御門に通じる土橋の様相が明らかとなりました。この調査では、赤石積みの石垣が現道下約50cmのところで確認されています。確認された石垣は、寛政年間(1789～1801)に築かれた土橋の石垣護岸と考えられるもので、部分的に後々の開発で壊されているところもありましたが、おおむね良好な状態で遺存していることが分かりました。

この調査では、石垣の全体構造をすべて確認したわけではありませんが、別の地点で行われた調査結果から、石垣下部には石垣自体の沈下を防ぐため「梯子状^{はしごじょうどうぎ}胴木」と呼ばれる丸太を梯子状に組み合わせたものを置き、その上に加工した赤石を5段積みになっているものと思われます。

一口メモ

県立美術館の対岸、佐賀城南堀端の散策ルート内には、佐賀城南堀石垣護岸を移設復元し、その構造を紹介しているものがあります。



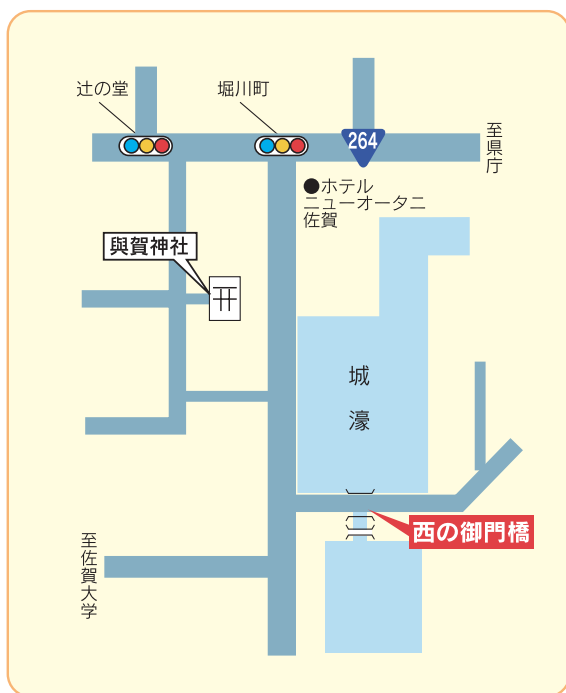
移設復元された石垣護岸



▲現在の西の御門周辺



▲確認された石垣護岸



佐賀市 58 歴史探訪

はがくれ さかなつ 「葉隠」に出てくる魚釣りのいたずら

山本常朝^{じょうちょう}が口述した『葉隠』^{はがくれ}といえば、戦国の気風を色濃く残す武骨な「武士道の書」として有名ですが、中にはほほえましいエピソードも出てきます。

佐賀藩初代藩主鍋島勝茂公^{かつしげ}の時代のこととして「聞書第七」^{ききがき}に、小姓^{こしょう}(※1)がやった釣りのいたずらの話がかかれています。「大胆なわらべ」として評判が高かった小姓の中野数馬^{かずま}ですが、かなりの腕白少年でした。

ある時、勝茂公が数馬に腰を揉ませていました。そのうちに勝茂公がウトウトと寝入ってしまうと、数馬は部屋を抜け出し、納戸方^{なんど}(※2)で御用だといって糸と針を受け取ります。数馬は針を曲げて釣針をつくり、糸を結んでお庭の池で魚釣りを始めました。そのうち、大きなフナが掛かりましたが、フナが跳ねた弾みで糸が外れて、部屋の中に飛び込み、勝茂公の顔にフナが当たりました。驚いて勝茂公が目覚めると、部屋の中で大きなフナが跳ね回っています。

勝茂公は「さてはあやつの仕業」と数馬を呼ぶが返事はありません。「どこに隠れたか」と庭に下りると、数馬は縁の下から「ワン」と一声鳴いて逃げていきました。

後に家老となる中野数馬が、年少のころから相当に胆が太かったという逸話です。この舞台は佐賀城内であったと思われます。どの御殿であったのかは分かりませんが、ひょっとすると創建期の本丸御殿が舞台となったのかも知れません。

また、この逸話は、諸藩の遊びの釣りに関する記録としては、最も古いものの一つだということです。

(※1) 藩主の身边で雑用を勤める役
(※2) 藩主の衣服や調度類を取り扱う役

一口メモ

山本常朝の『葉隠』の口述は、宝永七(1710)年に常朝の隠居所があった金立町黒土原で始まり、享保元(1716)年に常朝終焉の地となった大小隈^{だいしょうくま}で終わりました。黒土原には「大乗妙典一千部」^{だいじょうみょうてん}石塔と「常朝先生垂訓碑」が残っていて、周辺一帯は「葉隠発祥の地」として佐賀市史跡に指定されています。



▲常朝先生垂訓碑



佐賀市 59 歴史探訪

きゅうしゅう さい こ かい づか 九州最古の貝塚

今回は、佐賀市教育委員会が金立町千布で発掘調査を実施した東名遺跡^{ひがしなま}について紹介します。

東名遺跡では、平成5～8年にかけての発掘調査によって、今から7,000年前(縄文時代早期)の集落と墓地を確認しました。その後、巨勢川調整池を建設するため、周囲を5m程掘り下げたところ、集落と同時期の貝塚が偶然発見されたため、平成16年度から本格的な調査を開始しました。

九州の縄文時代の貝塚は、熊本県を中心に130カ所ほどが知られていますが、佐賀平野では今まで発見されておらず、東名遺跡が初めての確認例となりました。しかも発掘調査が行われた貝塚としては、九州で最も古いものでした。

調査の結果、ヤマトシジミ・ハイガイ・アゲマキ・カキを中心とした大量の貝殻のほか、シカ・イノシシをはじめとした動物の骨や魚の骨、ドングリなどの木の実、土器や石器などが発見されています。その中には貝殻の腕輪や、動物の骨に細かい文様をつけたアクセサリーなども含まれていました。さらに、木をくりぬいて作った器や木を薄くさいて編み込んだカゴなども発見されており、当時の技術の高さには目を見張るものがあります。

調整池の中で発見された6ヶ所の貝塚のうち、第1・2貝塚について平成19年度まで発掘調査を実施しました。残りの4ヶ所の貝塚については現地に盛土をし保存しています。

東名遺跡の調査によって発見された資料は、どれも国内最古級で、当時の人々の生活や文化を知る上で大変貴重な資料です。

一口メモ

巨勢川調整池内にある管理棟の一角に、東名遺跡ガイダンス展示室を設置しています。貝層の剥ぎ取りや貴重な出土遺物を展示しています。是非一度ご覧下さい。

開館：(火～金)10:00～13:00、(土・日・祝祭日)10:00～16:00
※毎週月曜休館、入場無料



▲シカの角で作ったアクセサリー



▲編みカゴ

